

会 長 挨拶

会長 深 山 明 敏

この春、私共は防衛大学校卒業60周年を迎えることになりました。

そこで、今回の会報は記念特集号として企画させていただいたところ、國分良成・防衛大学校校長から素晴らしいご祝辞を賜り、また同期生多数の投稿や「防衛大学校十年史」及び「アサヒグラフ」などの貴重な資料の提供を受け、お蔭様で久里浜に入校以来、現在に至るまでの各種の内容を集大成することができたことに、先ず感謝申し上げます。

昭和28年4月の入校任命者399名のうち、既に鬼籍に入った仲間が3分の1を超えており、物故者のご冥福、並びに健在者の一層のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

幸か不幸か、私共は教育制度の丁度変換期に育ち、国民学校の最初の生徒、戦後の6・3・3制に移行した当初の新制中学に入校し、大学も1期生という不思議な巡り合わせに何か宿命のようなものを感じています。

特に、保安（防衛）大学校は、過去の陸・海軍の教訓に基づき新たな視点で創造の途に就いたばかりだっただけに、戦後の混乱した世情・復興の流れの中で、一部の国民から冷たい・厳しい目を向けられながらも、榎校長の透徹した教育・指導方針の下、全職員と学生が一緒になって、あるべき姿を求め、お互いに暗中模索の日々を過ごした思い出の多い生活でした。

そして、卒業後も今日に至るまで、訓練を除けば銃・砲弾の発射や被爆の機会もなく、わが国の平和と発展に多少なりとも貢献できたのではないかと誇りを持つことは有難いことであり、感謝しております。

「大いなる精神は、静かに忍耐す。」と当時の林・統合幕僚会議議長が訓示で述べられたように、私共は多かれ少なかれ各種各様の「忍耐・我慢」を強いられる場面を経験してきた人生であったと思います。

昨今、わが国周辺の安全保障環境の悪化、トランプ政権誕生に伴う防衛費増額の要求などの外圧をむしろ好機と捉え、国家再生を期することも大切だと思います。即ち、榎校長の先達である福澤諭吉先生が明治維新当時に強調された「独立自尊」の気風・気品を一人ひとりが高め、国際秩序の構築に寄与すること、並びに日英同盟の教訓に学ぶことが求められているのではないかと考えるからです。

1期生会は、3年後に組織的活動を閉じようとしていますが、平均余命によれば、まだお元気な仲間も多数健在ですから、いつまでも心豊かに充実した余生を過ごして行きたいものと念じています。

卒業60周年を記念して・・・防大の原点に学ぶ

防衛大学校 校長 國分良成

本年3月、本校第1期卒業生の皆さまが卒業60周年を迎えられますこと、ここに防衛大学校を代表して衷心よりお慶び申し上げます。

皆さまが当時の保安大学校に入校されたのは昭和28年4月、つまり1953年であります。

偶然にも、私も昭和28年生まれですので、皆さまが入校された年に私はこの世に生を受けたこととなります。防大で言えば、私は20期相当となります。

これも偶然と言えそうですが、私は榎智雄初代学校長が教鞭をとられた慶應義塾大学法学部の出身であります。私は榎先生の足元にも及ばないことを自覚していますが、近づく姿勢と努力は怠らないようにしています。防大校長就任以来、事あるごとに榎先生の語られた言葉の数々をひもとき、そのたびに心を新たにしております。私自身は榎先生の訾訶に直接に接したことはございませんので、残された言葉に触れるしか手立てがありません。それでもいまなお、それらを通じて、当時の自衛隊と防衛大学校に対する厳しい時代風潮の中で、榎先生が固い信念とバランス感覚にもとづいて、いかに勇気と英断をもって学校運営に当たられたかを痛切に感じることができます。

この数年、私は榎先生の慶應時代の足跡に大きな関心を抱いております。なぜ、榎先生があれほどの熱い思いで防大建設に心血を注がれたのか。その動機はどこにあるのか。先生が防大校長に就任されてから以降の記録は多く残っており、そうした問いに対する研究や論評もこれまでいくつもあります。私の関心は、防大以前の慶應時代における榎先生の経験の中に、その後防大校長として全身全霊を捧げる要因があったのではないかとこの点であります。

この問いについて、私はすでに一定の解答をもつに至っております。それについては、昨年12月に慶應義塾大学の三田演説会において披露させていただきました。福澤諭吉は、日本社会にディベート文化を導入すべく、わが国初の演説館を三田に造りました。現在、重要文化財となった三田演説館では年に数回演説会を開催していますが、そこで昨年12月、「防衛大学校と慶應義塾」と題してお話をさせていただきました。それは慶應義塾の機関誌『三田評論』の今年の2月号に掲載されています。その結論は、以下の3点に集約することができます。

1. 榎智雄は、防衛大学校において、戦後の民主主義体制の中で陸海空を統合した、きわめて斬新な士官学校を創りあげた。英オックスフォード大学での経験が豊かな榎は、全寮制生活を軸に広い視野、科学的思考、豊かな人間性を育成することに主眼を置いた。ここでの学生生活は、自由と規律の厳格なバランスが求められ

た。それはいわばリベラルアーツ・カレッジともいえるもので、将来の幹部自衛官としての知性、体力、精神力を備えた人間の土台を作ることに最大の目的があったといえる。

2. 榎智雄のこのような思考と行動には、慶應義塾における一つの辛い経験が背景にあった。榎は小泉信三慶應義塾長時代の常任理事（副塾長）として、昭和8年（1933年）から戦後小泉塾長が退任するまで学校運営の中心にいた。榎常任理事の仕事は多岐にわたるが、主たる仕事は日吉キャンパス建設であり、そこに予科と工学部を設置することであった。榎は校舎から体育施設の建設にいたるまで責任者として切り盛りしたが、何よりも心を砕いたのは学生寮建設であった。つまり榎の描いた大学予科は英国式のリベラルアーツ・カレッジであった。しかし戦争末期、海上にいれなくなった帝国海軍が司令部を日吉キャンパスに移動させた。そのため、日吉は米軍の爆撃対象となって破壊され、榎の描いた新キャンパス構想は頓挫した。晩年、榎は「慶應でやれなかったことを防大でやった」と述懐しており、その言葉の意味は以上のような慶應での経験にあった。
3. 防衛大学校には、小泉信三と榎智雄という二人の人物を介して福澤諭吉の精神文化が注入されている。福澤は一貫して国家官吏となることなく、民間人としてその一生を終えた。しかし福澤は明らかにナショナリストであった。彼は合理主義と抵抗の精神を持ったナショナリストで、自立した個々の市民を作ることによって立派な国家が存立すると考えた。福澤の『学問のすすめ』の中の有名な言葉、「一身独立して一国独立す」「独立の気力なき者は、国を思うこと深切ならず」、これが福澤の本質であった。榎智雄は自身の研究の中でもしばしば国家と個人の関係について論じているが、その原点はまさに福澤にあった。榎は小泉を心から尊敬していたので、小泉から学んだ福澤精神を自然に防大に注入したのかもしれない。そうした意味で、防衛大学校は「防衛義塾」ともいうべき日本で唯一無二の大学である。

以上が、私の講演の要旨です。防衛大学校の今日の雄姿は、榎智雄先生の思いを原点に、一人一人の学生と卒業生がこの学校建設に思いを込めて創造してきた一つの結晶であります。そうした防大の原点創造に参画された第1期卒業生の皆さまの存在と思いは、現在の防大を預かる我々にとっては何にも代えがたい宝であります。今後とも、歴史の証人として、我々に対して大所高所から様々な啓示をお与えくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後に、改めて、防衛大学校第1期生の皆さまの卒業60周年に対して、心からのお祝いを申し上げます。

防大生に与ふ

元 内閣総理大臣 吉 田 茂

独立国の国民として、国の独立程大事なものはなく、この独立を守る事こそ、国民としての名誉であり、誇りであり、この誇りが愛国心の基礎をなすものである。国民に独立を愛し、独立を守る決心なくんばその国民の存在はあり得ない。この決心が一国の興隆繁栄を来たすものである。第一次大戦の初め、パリがドイツ軍に、まさに占領されんとする時、首相クレマンソーは、国民に告げて曰く、「パリーの外で守り、パリーの内で守り、又、パリーの外において守るべし」と。仏国民にもこの決心ありたるが故に、破竹の勢ひを以って、攻め来たりたるドイツ軍を遂にパリーの外に退け得たのである。第二次世界大戦において、英国軍が仏白国境に敗れて、ダンケルクより三十余万の敗残兵僅かに身を以って英本国に引き揚げ、武器、弾薬、悉く大陸に遺棄し、国内には国を守る何等の兵備なく、ドイツ軍の英国侵入は時の問題と思われたる時、チャーチルは議会で演説して曰く、「英国内において敵を防ぎ、英国外においてこれと戦ひ、遠くカナダに退いてドイツ軍と戦ふ」

と云った。英国々民の戦闘意識を最も明白なる言葉を以って云い表したのである。クレマンソー及びチャーチルのこの決心がパリを守り、英国を守り得たのである。然しながら、兵は凶器である。これを用ふるは苟しくもすべきではない。又、これを用ふるにおいてはこれを止むる用意がなければならない。所謂、武なる文字は、矛を止むると書くのである。日露戦争の時、児玉総参謀長は、奉天会戦を以って日露戦争を終るべき時なり、と大本営に進言して、兵を収めて日露戦役の功を全うした。この深謀遠慮ありてこそ武將と云うべく、然るに第二次世界大戦における我が軍は、その勇戦善戦、日露戦争に比べて優るとも劣る事なかりしにも拘らず、進むを知って退くを知らず、遠くブーゲンビル、ラバウルまで進出して徒に大兵を孤島に集中暴露して、日本本国との連絡用



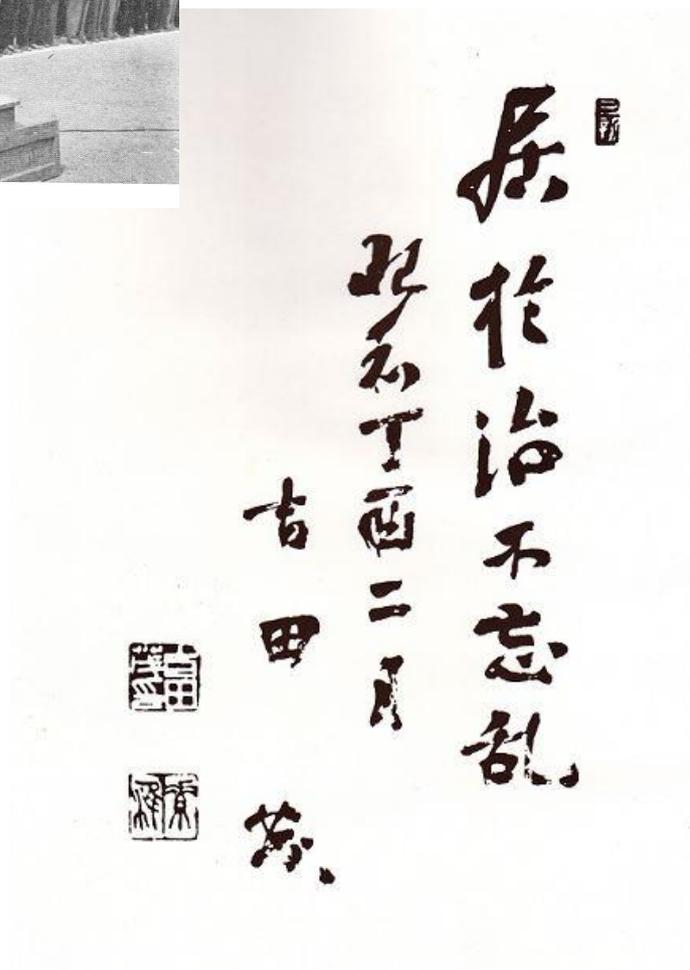
意なく、米軍のために我が艦船、飛行機等の壊滅せられるや、遂に本国との連絡絶たれて、大兵空しく、南洋海上の孤島に置き去りにされて全滅し、遂に南方作戦は頓挫した。歴史の示すところは、以って将来の戒めとなすべく、兵を用いて兵をとどむるの用意なくんば、善謀善戦も何の益するところなし。

兵を学ぶ諸君、常に茲に心を致されん事を望む。(昭和 32 年 3 月、雑誌小原台 7 号)

(出典 防衛大学校十年史)



吉田前首相

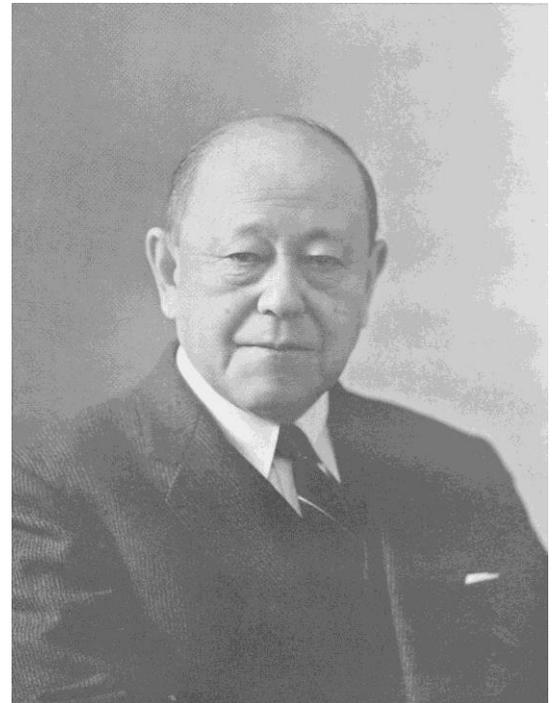


保安大学校第1期生 入校式式辞

昭和28年4月8日

保安大学校長 榎 智 雄

保安庁長官代理増原次長並びに来賓各位の臨席の下に本日保安大学校第1期学生の入校・任命式を行い得ましたことは、保安大学校教職員及び学生一同の無上の光栄と致すところであります。今日あるを得たのもひとえに本大学校創設計画以来の関係各位の絶えざる御尽力と支援の結果でありまして、このことは我々の心底深く銘記してその責任の重きを思い、職務に精励致す覚悟であります。



学生諸君にお話いたします。本日諸君をむかへましたことは、事実上の本大学校の発足であり、我々一同は心よりの喜びを禁じ得ないのであります。この大学校が将来有能にして忠誠なる多くの人材を輩出して、かがやかしい歴史を作るものと確信いたしますが、もしこのような想像が許されるならば、本日の入校任命式は真に意義深いものでありまして、今日の機会に遭遇したお互いの幸運をよろこばずにはおられないのであります。諸君が本大学校を志望し、今日この席に列せられたについては必ず慎重な考慮の結果決定されたことと信じます。その堅い決意と誠実に対して心強い信頼の念をいただくもので、4カ年の課程を終了して保安官並に警備官たるの初志を貫徹されんことを期待するものであります。我々はその生を受けたこの国と、その民族に無限の愛着と大きな誇を持つものであります。わが祖先はここ住み、かつ励み、我々に多くの遺産を残してくれたのであります。その伝統、文化、勤勉、不屈の魂と数えれば限りなく挙げることができましよう。長い間には何れの国にも消長があり、興隆衰退のあることは免れません。しかしその興るや必ずそこには理由があり、又衰うるやその原因も必ずあるのであります。我々は最近誠に悲惨な多くの労苦を重ねてまいり

ました。しかしすべての希望を失い、その誇を捨てるにはあまりにも強い自負の心の残るを如何とも為しがたいのであります。我々は心を新たにし国の興隆する原因を探究して、ひたすらこの途に励みたいのであります。わが国民はいわば運命を共にする船中であって、航海を続けるようなものであります。いつ火を發し浸水を招くか、全く予知しがたきものがあります。これは平和を念じ、その郷土と文化を愛する国民の一日たりともゆるがせになし得ないことでありまして、災難に際して立向う忠誠の心なくしては、かかる災難を防ぐことは絶対に望み得ないのであります。国が諸君に要請するところも、また国民の諸君に期待するところも危急に際しての、人としてまた国民としてのかかる忠誠の心であると考えております。

諸君の眼前に拓がる今後4年間は、保安大学校における諸君の希望の歳月であります。これは諸君にとって大切な年月であるとともに、実に国民にとっても希望か、失望かの日々であります。その成否は独り諸君の問題であるばかりでなく、国民の立場よりすれば、その期待が報いられるか否かの重大事なのであります。我々はこのことを常に記憶せねばなりません。而してこれに応うる途は種々挙げることかできようと思いますが、我々は今日特に二つの点を考えて見たいと存じます。

第一に諸君の任務は偏することなき均衡のとれた人物を要求していること、第二に諸君の任務は民主制度に対して的確ご理解を要求していること、これであります。

第一の点であります。諸君が有用な国民の一員であることと、教養高き社会人たることを心がけねばならぬは勿論であります。4ヵ年の諸君の課程を、我々は三つに要約して考えております。すなわち一つは人としての修養練成であり、他の一つは工学及び保安、警備の学問に関する基礎知識の習得であり、さらに他の一つは指導統率の資格を具うることであります。この三者はそのいずれかに偏することを許さぬものでありまして、常に均勢を保つことがその重要な条件であります。いかに学問技術の造詣に深くとも、人としての性格や指揮する材幹において欠くことあれば、本大学校に履修せる目的の大半は失われるのであります。また人としてすぐれていても技術上の能力が劣るならば、かかる人は今日の有能なる指揮官として期待することは困難でありましょう。

さらにその修練学修の態度についても一言述べますが、これも均衡のとれた態度を必要とします。学理を無視する、または冷静な判断を欠く、徒らなる興奮や、狂信的な行為は我々の絶対にとらないところでありますが、さりとして信念のない修業の態度にも賛

成しないものであります。要は諸君がその将来の任務の重要性と、その責任及び名誉を自覚して、強い意志の力をもって錬磨することであります。

我々の心よりの願いは、諸君の修養や学業の結果が一つの信念となって諸君の生涯を通じて役立ち、諸君の学校の選択が誤りでなかったことを証し得て、そのことに大きな誇を感じていただきたいのであります。

お話ししたき第二の点は、諸君が民主主義に対して正確な知識をもっていただきたいこととあります。本大学校は諸君の責任感や名誉心について大きな関心を持つものでありますが、また規律や服従の精神についても、同様に重大な関心を待つものであります。民主主義と服従の精神、或は自由と規律と言うがごときことは、おそらく諸君には撞着矛盾の言葉と響き、不思議の感じを持たるるであります。しかし実際には規律なくして真の自由はなく、遵法精神又は正義に服従する思想なくして真の民主制度は成立いたしません。御承知のとおり、個性の尊重は近代文明の基礎であるとともに、その大きな推進力でありました。個人に蔵せらるる創意と発現の力が近代の人類生活に大きな変革をもたらしたことは、今更述べるまでもありますまい。我々は個性の発展を重視するとともに、大きな期待をこれにかけるものであります。諸君の個性の発展が我々の最大の関心事であることば申すまでもありません。しかし我々のいう個性は野放しのものではなく、また個人の自由は放縦を意味するものではありません。簡単に言えば、正しきことを目指すことにおいてのみ個性の発展があり、正しき行いにおいてのみ自由があるのであります。社会は一つの約束の下に行つてならぬことを抑制し、あるいは禁止し、また行わねばならぬことを奨励し、あるいは命ずるものであります。この約束を作るのが世論であり、あるいは国民の総意と呼ばれるもので、我々の道徳的拘束となり、あるいは法律となり、道徳的服従とか遵奉精神となって現れるのであります。このようにして命令服従の関係が合理的に成立したときに民主主義が実現されるというべきでありましょう。すなわち命令を発して正義の信念に何のくもりもなく、服従して我々の個性や自由に何の矛盾も感じないのであります。

このような考え方は国民全体にとって共通の問題であることは言うまでもありません。しかし諸君にとってはその任務の関係から特に考えるべき理由があるのであります。即ち指揮統率に関することとありまして、諸君の義務の遂行には常に命令及び服従の関係が伴うものでありまして、最も注意深き研究と錬達を必要といたします。今後4ヵ年

間の大学校生活において、規律および服従の神髄を体験されんことを望みます。服従のみ存在して自由や個性尊重が認められないならば、それは奴隷的關係でありまして、近代文明の許し得ないところであります。また自由のみ存して服従のない社会かあるとしたら、それが夢に画く国でなければ、恐らくは無秩序混乱の社会でありましょう。いやしくも共同生活の営まるるところ、規律なくして自由の生活はありません。この点は諸君の任務上本大学校において習得さるる重要な教課の一つであります。

今日諸君は国の要請によって入校・任命を受けました。その要請された目的に対して努力すること、諸君の自由なる道徳的義務とは一致するのであります。その任務を尽す



ことによって、諸君の個性はいよいよ光輝を増すことでありましょう。諸君の入校の決意に対して、我々は万こうの敬意を表するものであります。またその誠実に対して全幅の信順を寄することを再び申します。我々また誓って諸君の誠実と希望に応えたいのであります。今日よりの諸君の生活は日を追って意義あ

るものとなりましょうし、またすべての青年の特権である旺盛な元気と、高き希望に燃えあかることでありましょう。我々の念願は諸君がその決意をいよいよ固くして、やがてこの学校を選びしことを無上の喜びであるとし、また我々も諸君を得たことを無上の誇りとしたいのであります。以上入校・任命式に当たって所感の一端を述べました次第であります。

(出典 防衛大学校十年史)

防衛大学校第 1 期学生卒業式における式辞

(1 期生の歩んできた道)

昭和 32 年 3 月 26 日

防衛大学校長 榎 智 雄

小滝防衛庁長官、吉田元内閣総理大臣並びに内外朝野多数の来賓を迎えまして、本日防衛大学校第 1 期生の卒業式を挙行いたしますことは、卒業生はもとより、本校職員及び在校生一同の無上の光栄と致すところであります。来賓各位に対しまして、一同を代表し、その感激と感謝を心より申しあぐる次第であります。

第 1 期生は昭和 28 年 4 月入校以来、4 年の教育訓練を終了し、卒業と同時に幹部候補生として、各自衛隊に配属される運びとなりました。今日の卒業に至るまで、歴代の防衛庁長官、歴代の防衛庁政務次官、防衛庁次長、統合幕僚会議議長、陸・海・空各自衛隊幕僚長、各付属機関の長ならびにそれぞれの庁内部局、部隊および機関に所属される各位をはじめとし、諸官署及び諸大学、官民の有志、米国軍事顧問団ならびに在日諸国大使館附武官、その他の方々より受けました支援、好意、激励は甚大のものでありまして、今日これを思うことなくしてこの挙式を致す事は不可能であります。またかつて本校にあつて、教育訓練にあたり、又は事務を管掌されし各位に対しても、深く感謝いたす次第であります。いちいち芳名を挙げてお礼を申しあぐべきところ、時間の都合上、勝手ながら省略させていただきます。その御援助、御好意に対し衷心より謝意を現し、本校の永く記憶いたすところであります。

開校以来 4 年はまたたく間に経過しましたが、1 期生にとっては事多き期間でありました。この期間の教育は、前半 2 年は久里浜の仮校舎において、一昨年小原台の新校舎に移転の後はこの地において行いました。設備の未完成、学風伝統も未だしの感強く、終始準備時代を脱しなかつた時期に入校し、勉学を続けたのであります。行く手に希望



の光は見えても、なにか漠たるの感のあったことは免れず、周辺の事情も励みを与えるものとは言えなかったのであります。この間、1期生は物心両面の創設事業の先頭に立ち、はっきりせぬ境地に、行く先を開く開拓者となったのであります。このためには覚悟と勇気を要したことはもちろんであり、その決意と努力は高く評価さるべきであります。

学校は4年間に、その内容の是非はしばらく別として、その歳月だけの進展をしたことは事実であります。同時にこの進展は1期生の成長について語ることなくして、考慮し得ないところであります。1期生はもちろん学校より多くを受けました。しかし1期生は、学校に多くを残していくことも事実であります。それは学風伝統の基礎を造ったことで、その一つは「学生の習慣」とでも呼ぶべき風習を植え付けたこと、他の一つは積極自主の気風を生んだことであります。「学生の習慣」について見れば、規律のうちに生活する風習をつくり、これがなにを意味するかを知る機会を設けたことであります。理性ある服従に慣れることによって、秩序、正確、敏速の実現はもとより、組織ある行動の意義を知り、この学校を将来部隊幹部としての礼儀、態度、協力等幾多の適性を訓練する場たらしめたことであります。4年の共同生活において一応このような形態を整えたことであります。

次に積極自主の気風を生んだことであります。学生将来の任務には気力、体力、情操において、強さと気品を要望されております。その一例は校友会活動でありまして、乏しい時間の中に、「見物人ではなく、自ら行うものである。」との標語の下に、全学生が進んで体育活動及び文化活動に目覚しく発足したことで、その多種多彩なる活動のうちに自制の精神と敢為の風が、その端緒を開いたことであります。これはやがて本校学生生活に深く根をおろし、よき学風伝統を造るうえに大きな貢献をなすものと信じます。

「学生の習慣」と「積極自主」の気風を残したことは、ただに本校の学風伝統によき発端を与えたばかりではなく、このことは、卒業生諸君の将来の持場と、その責任の遂行に必要なものであります。すなわち責任遂行には、性格と意志の力を必要とします。知性あり、信頼するのに足る性格は、よき習慣の上に育成され、強い意思は積極自主の気風のうちに成長するのであります。責任ある任務は多々ありましようが、特に重い責任を果たすに当たって、その責任の解除される瞬間まで、全力を尽すことは、決して他力のよくなし得るところではありません。ただ強力なるおのれの性格と意思のみが、よく成就するところであります。米国海軍兵学校の広間の正面に、大きな額があつて「船を捨てるな」と筆太の文字で書いてあります。この筆法で行くならば、我々の場合「持ち場を捨てるな」というべきでありましよう。任務にいかに強い性格と意思が伴わねばならぬかを、思わしむるものがあります。

いうまでもなく、防衛について、国民の念願するところは国土の安泰と、民族の文化及び民生の繁栄であります。わが民族は、その国土、言語風俗、歴史伝統を遠き昔より

うけ継いできました。長い間には浮沈隆替もありました。しかしその固有のすぐれた文化はもとより、我が国民の一路進歩を目指す熱意とその実現の可能に対する自信、殊にその努力勤勉については、われも誇りを持ち、他もまたこれを認めております。新しい文化、新たなる繁栄福祉に対する念願が湧き起り希望と自信に満ちているというのが、今日のわが国の状態であろうと信じます。

しかしこれは国の独立と民族の自由があつて、はじめて可能のことであつて、もしこの独立と自由が失われたならば、おのれの文化も、繁栄もなく、理想はもとより、人生に対する励みも起こることなく、民族は屈従の下に暗たんたる毎日を送るよりほかはないのであります。諸君の持場とその責任は、このような憂慮を国民と共に分かち合うことであり、その持ち場の責任の遂行は愛国心の発露であり、また愛国者の仕事なのであります。あるいはこのような憂慮は根拠のない、単なる杞憂に過ぎぬとして退ける議論があるかも知れません。しかし世界の各地には未だ正義人道が拒否せられ、平和が無視される状態が起りつつあるのであります。災厄と異変は思わざる時に思わざる形において突如として起り、今日の平和は、明日の混乱と化することは、あまりにもしばしば、広く人類の経験してきたところであり、よき準備、これが異変に対する最善唯一の対策であることは、疑う余地のないことでもあります。

国民とともに憂慮を分つ心は、諸君を進んで防衛の任務に参加せしめました。その心は称讃すべきで、これは諸君の大きな誇りであります。その使命は貴く義務は重いのであります。その義務を一言に尽くせば、遵法の義務、遵法の精神であります。国民の憂慮の念は、その総意となり、国会及び政府を通じて、諸君の任務の持ち場を定めたのであります。ここに政治上法律上の諸君の任務は明らかであり、国民の諸君におく信頼はこれを基として起こるものであります。遵法の精神とは次のことでもあります。すなわち意見は各人自由である。しかし国民の意思の一度決したときは、その定め誓つて従うという民主主義の精神は、国民の諸君に対する信頼の起こる第一歩であります。この政治上法律上の義務は根本的のものであります。しかし同時に国民はさらに深く道義的精神的の意味において、諸君に求むるものがあるのであります。高い水準に達せる社会は教養を重んじ、情操を尊び、節度を敬う感覚を持つものであります。修練の積まれた社会には、自由のうちに戒律がおこなわれ、自制と責任ある行為がなされ、人の威信が尊重されるのであります。ここにおのずと公に奉ずる精神がうまれるのであります。諸君は過去4年、一方に規律規則の生活を尊ぶとともに、他方積極自主の活動を重んじ、また一方には科学理論の学問を学ぶとともに、他方教養情操の習得に努めたのもこのためでありました。卒業後、直ちに必要なる専門職業的の教育訓練の時間を、許す限り割愛し、つとめて広い基礎的の学問を履修したのも、このためと、将来の進展を慮つたためでありました。すなわち諸君は国家の責任ある一員であるとともに人間社会の責任ある一員でなければ、国民の信頼を受けることは困難であります。世界いずれの主要国も

防衛に当たる士官養成の学校を設けております。長い歴史をもつもの、新たに発足するもの、いずれもその教育について極めて熱心に絶え間ない研究を続け、過去の伝統に慎重であると共に、また時には思い切った改革も加え、人間社会の一員たるべき点については、特に考慮を払っております。数年前にハーバード大学は「自由社会の責任ある人間と市民」をつくるという目標のもとに、大学4年の課程を「一般教育」と称して、大胆な改革を行い、しかも、専門職業教育を可能ならしめております。このような戦後の風潮を見て米国士官学校では、これはすでに130～140年も前より同校の教育方針であったと称え、同校は、ただひとすじに専門的な初級士官の養成にのみ没頭してきたのではなく、教養高き人士を養成したと主張しております。防衛大学校と同様の目的を持つこの種の学校の卒業生は先ず愛国者であります。その言葉の意義は広いものであって、正義人道の勇者でもあり、擁護者でもあり、また正しき平和の使徒でもあることを意味するものでありましょう。諸君に対する国民の信頼も、その根ざすところ深く、人間社会の教養に期待することの多いものであることを忘れてはならないのであります。

諸君は今日より、人生の新たなる行路に踏み出します、ここに国に尽くし、世に役立つ意義ある生涯が始まるのであります。その教育訓練課程はいよいよ専門に入って、諸君の重大な使命のために、一層の努力を要求することでありましょう。諸君の備える立派な資質は十分にこれに応ずることのできるものと信じます。多くの先輩の下に、また多くの同僚の間であって、常に謙譲であり、常に積極的に協力せられんことを希うものであります。

今日の卒業式を迎えわれわれ防衛大学校の教職員、在校生一同は諸君の前途幸多かれと祈り、人生への熱意と勇気のいよいよ高からんことを念ずるの情の切なるものがあり



ます。諸君はわれわれに多くのものと、貴い記憶を残して去って行きます。われわれ一同は諸君に対し大きな誇りと期待を持つものであります。

終りに臨み、再び今日の第1期生卒業式に臨席くださいました来賓各位に対しまして、衷心よりお礼を申し述べ、この式辞を終る次第であります。

(出典 防衛大学校十年史)

経過報告（防大 10 周年行事における報告）

副校長 鈴木 桃太郎

本校設立以来 10 年間の経過の概要を御報告申し上げます。

本校は、保安庁法に基づき、昭和 27 年 8 月 1 日保安大学校として発足し、同月 19 日初代校長榎智雄が発令されました。同年 12 月第 1 回の学生募集を行ない。応募者総数は 11、619 名でありました。昭和 28 年 4 月 1 日横須賀市久里浜駐屯部隊の施設の一部を仮校舎として開校し、同月 8 日に第 1 期学生が入校いたしました。昭和 29 年 6 月保安庁法に代わって防衛庁設置法が施行されるに伴い、同年 7 月防衛大学校と改称され、今日に至っております。昭和 29 年この小原台の地に校地をとり、校舎並びに諸施設の設備を始め、昭和 30 年 4 月に移転を完了いたしました。その後校地、校舎も年々増加し、現在の敷地 215,010 坪、建物延 26,510 坪であります。



学生数は、当初毎年陸上要員 300 名、海上要員 100 名、計 400 名で発足いたしましたが、昭和 30 年 4 月入学の第 3 期生より前述の各要員に航空要員 130 名を加え、現在 1 学年の定員は 530 名となっております。こえて昭和 32 年 3 月に第 1 期生を卒業生として送り出し、本年 3 月第 6 期生が卒業して卒業生総数は 2,645 名に達し、夫々各自衛隊の中堅初級幹部として活躍しております。これに在校生総数 2,006 名を加えますと、発足以来過去 10 年間に実に 4,651 名の教育訓練を実施してきたこととなります。

昭和 36 年 6 月防衛庁設置法の一部が改正されて、本年 4 月より入校定員 22 名、修業年限 2 年の理工学研究科の設定を見、現在電子工学課程学生 19 名の教育を実施しております。これを所属機関別に見れば陸上自衛官 8 名、海上自衛官 2 名、航空自衛官 4 名、自衛官以外の自衛隊員 5 名となっております。

更に本大学校は、昭和 33 年 5 月法律改正により、外国人留学生の教育を実施することとなり、タイ国より同年入学の第 6 期生に 1 名、昭和 35 年入学の第 8 期生に 1 名の留学生を受け入れました。

現在本校在職の職員は、教官 254 名、自衛官陸・海・空あわせて 254 名、事務官等 422 名、計 930 名であります。

本大学校は、その設立の目的にも示されているように、将来陸・海・空各自衛隊の幹部自衛官となるべきものを教育訓練する機関でありまして、学生に広い視野と伸展性のある資質を与え、科学的に訓練するとともに、国家に対する責任感の強い幹部自衛官を育成することを一貫した教育方針としております、この方針に則り、教育課程においては、大学設置基準に準拠して、一般教育、理工学及び防衛学に関する学理とその応用を授け、幹部自衛官として必要な基礎的学力及び能力を育成するとともに、訓練課程においては、自衛隊の必要とする基礎的な訓練要項について錬成し、幹部自衛官としての職責を理解して、これに適応する資質および技能を育成しております。また、学生の生活を通じての精神的、肉体的指導については、学生舎における生活を通じてこれを行なうとともに、他方、学生全員の参加する体育活動及び各種の運動競技を奨励することによって、個人及び社会に対する義務、責任の観念を養うとともに、強健な体力と旺盛な気力を育成するようつとめております。

以上の趣旨に基づき、教育関係においては、初期開設の機械、電気、土木、化学の 4 専攻の外に昭和 30 年航空、応用物理の二つが加わり現在 6 専攻となり、このほかに今年より研究科 1 専攻が加わりました。

教官陣も年とともに量、質ともに充実し、現在教官定員の 88.5 パーセントを充足し、そのうち博士の学位を有する者の数は、現在約 90 名となっております。

訓練関係においては、第 1 学年においては陸・海・空の区別なく訓練を課し、第 2 学年以上においてそれぞれ三自衛隊要員に配分され、それに伴って多少異なった訓練を受けるようになっております。訓練の主力は、これを一般大学の休暇時におき、部隊実習、乗艦実習、航空基地実習等 1 学年に 6 週間をこれに費やしております。

施設の主なものをあげますと、蔵書約 10 万冊を有する図書館、80 名を同時教育できるオラル・アプローチ法による語学実習室、高電圧実験室、ロケットエンジン実験室等を数えることが出来ます。その他の施設整備についても年とともに内容を充実整備し、今や旧制大学と比肩の域に達しようとしつつあります。一方訓練体育の施設についても、近代設備を誇る体育館、日本水泳聯盟公認のプール、舟艇大小合わせて 58 隻を擁する 11,200 平方メートル (3,384 坪) の海上訓練設備等逐次完成を見てまいりました。生活環境についても学生舎の増強、厚生施設の充実、職員官舎の拡充等、見るべきものが多々あります。

以上に要した費用は、施設整備関係概算約 18 億円、設備関係約 11 億円で、学校維持のための経常経費現在約 11 億円であります。これらは、同程度の規模において、単に学問教育のみを行なっている一般大学に比較いたしましてかなり少ないものではあります。10 年と言う若い歴史を考えるならば、これは長足の進歩といえることができる

保安大学校第1期入校学生名簿

第32小隊天野靖一君ご母堂保管名簿より抜粋 平成29年1月14日

| | 第11小隊 | 第12小隊 | 第13小隊 | 第21小隊 | 第22小隊 | 第23小隊 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 荒海 巖 | 石原 隆 | 浅井忠夫 | 井上 武 | 上野秋生 | 岡 靖人 |
| 2 | 安藤輝一 | 磯谷幸三 | 池田 謙 | 河村未久 | 内田 溥 | 岡村忠重 |
| 3 | 安梅幸永 | 奥原廣人 | 今井信武 | 木原昌彦 | 梅根佐久郎 | 岡村光正 |
| 4 | 石松茂毅 | 清原 博 | 岩田一明 | 陸井益三 | 岡田 毅 | 笠松徹三 |
| 5 | 井上雅章 | 楠元敦之 | 浦川 正 | 小西岑生 | 小賀正条 | 金木祐亨 |
| 6 | 岩坪 宏 | 上滝 巖 | 小田原晃 | 小林英雄 | 大塚久信 | 神村明德 |
| 7 | 江戸 満 | 佐々木保 | 大黒 光 | 坂柳成功 | 川崎年夫 | 北原 明 |
| 8 | 江本俊雄 | 佐藤 正 | 河原正義 | 白石洋介 | 北村 博 | 北村揮一 |
| 9 | 岡 聡 | 七田真次 | 久保田裕士 | 城尾百男 | 小林泰義 | 清島日出男 |
| 10 | 大西知弘 | 四宮 勝 | 倉田光雄 | 杉浦修士 | 櫻井 茂 | 国枝金正 |
| 11 | 小原義造 | 菅原壽郎 | 後藤 理 | 鈴木喜一郎 | 佐藤 保 | 源川幸夫 |
| 12 | 北村哲三 | 高橋常清 | 小出雄一 | 砂土居彬 | 三宮啓典 | 鯉沼義則 |
| 13 | 熊谷新次郎 | 高山雅司 | 澤井隆秀 | 高橋房夫 | 鈴木吉高 | 後藤 薫 |
| 14 | 下田朔雄 | 遠茂谷博之 | 佐々木良 | 竹内 俊 | 高橋 弘 | 小林信雄 |
| 15 | 谷 功 | 富田定幸 | 才新基一 | 竹原幸一 | 竹之下憲弘 | 杉浦満寿男 |
| 16 | 高橋勲人 | 南任靖雄 | 志水秀文 | 田崎英之 | 田中 治 | 園川 清 |
| 17 | 難波清史 | 野島達雄 | 鈴木英夫 | 田沢正美 | 中 典之 | 田畑一朗 |
| 18 | 長尾 司 | 橋本彦三 | 高橋洋治 | 竹井 溥 | 中尾時久 | 遠山久人 |
| 19 | 中蘭照之 | 浜田一信 | 竹内誠一郎 | 中村幹生 | 中田寿美夫 | 床井徹男 |
| 20 | 長野美和大 | 馬場駿快 | 田中康之 | 中津川秀明 | 中山 清 | 中部晋行 |
| 21 | 西成昭美 | 人見五郎 | 中島政弘 | 薙野俊一 | 長谷常俊 | 萩野昭朗 |
| 22 | 新居洋一 | 福本元康 | 西野彰泰 | 新津保義 | 畑田 勲 | 秦 政美 |
| 23 | 野田 洋 | 藤井尚昭 | 常本省三 | 西久保 剛 | 原田宣夫 | 藤戸誠三 |
| 24 | 菱田植樹 | 堀田哲朗 | 富田恂二郎 | 西田 晃 | 福田亮治 | 前田武彦 |
| 25 | 東 俊 | 星島 公 | 浜口守男 | 野村栄一 | 松本隆行 | 牧 康策 |
| 26 | 袋 昭彦 | 前川 清 | 樋口和彦 | 長谷部俊郎 | 宮川正四 | 松本信義 |
| 27 | 松島史尚 | 前田利昭 | 平井 進 | 林 孝恒 | 宮中正壽 | 松山省二 |
| 28 | 前原輝男 | 向吉長門 | 藤岡 隆 | 藤谷 隆 | 峯田信乃夫 | 溝江琢磨 |
| 29 | 前村義明 | 村上好和 | 馬渡利臣 | 細谷隼三 | 本宮哲郎 | 宮本 宏 |
| 30 | 松本 靖 | 村岡英之 | 森野安弘 | 松浦育郎 | 守屋義弘 | 矢田部稔 |
| 31 | 宮本直躬 | 山口 恰 | 森本文雄 | 松島 巖 | 山根正和 | 山崎秀夫 |
| 32 | 宮本隆一 | 米山治通 | 森園 繁 | 松本克彦 | 三浦 衛 | 山下昌宏 |
| 33 | 和才 剛 | 渡辺政直 | 湯浅 彊 | 山田和行 | 和佐田 昂 | 渡 正明 |
| 34 | | | 吉川圭祐 | 油井碩也 | | |

| | 第31小隊 | 第32小隊 | 第33小隊 | 第41小隊 | 第42小隊 | 第43小隊 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 阿部博男 | 阿部順治 | 安藤堅一 | 甘利富重 | 伊藤政美 | 荒武良弘 |
| 2 | 安達勝明 | 天野靖一 | 石山 晃 | 伊左次達 | 今野克己 | 安藤雅章 |
| 3 | 青柳隆郎 | 石井忠司 | 大江 博 | 伊藤 茂 | 上野博雄 | 磯貝 武 |
| 4 | 石川 昭 | 内海澄夫 | 小野寺勇 | 稲垣 厲 | 内山実人 | 石塚鑛司 |
| 5 | 伊東靖郎 | 大島義久 | 小野 勇 | 上田愛彦 | 岡部義信 | 井上正一 |
| 6 | 上田誠也 | 香川武瑛 | 織田稔夫 | 大木 実 | 鹿島田矩基 | 伊藤 巖 |
| 7 | 遠藤 了 | 検見崎賢 | 河村和甫 | 大崎 皓 | 勝山 満 | 石原敬之 |
| 8 | 江沢陽二 | 小林茂昭 | 河合一郎 | 大村 了 | 河村和彦 | 上野 怜 |
| 9 | 小坂田芳也 | 小出智幸 | 加藤俊明 | 加来寿和 | 近藤一視 | 大橋丈夫 |
| 10 | 木村 隆 | 佐々木直 | 倉園貞夫 | 国武宮生 | 坂本文雄 | 大島直光 |
| 11 | 草島萬三 | 杉本泰隆 | 篠永茂夫 | 久保 彰 | 佐久間一 | 小野原亨 |
| 12 | 久保健二 | 鈴木昭雄 | 白木弘敏 | 好田一俊 | 佐藤芳夫 | 尾坪祐三 |
| 13 | 斎藤元行 | 末次信正 | 住田 剛 | 小西 忠 | 志摩 篤 | 銚谷八三郎 |
| 14 | 佐藤庸男 | 関口尚利 | 鈴木竜生 | 菰田康雄 | 高橋定雄 | 印牧武次 |
| 15 | 鈴木信吉 | 田中康夫 | 関 重光 | 近藤忠男 | 寺崎洋一 | 小谷 章 |
| 16 | 鈴木富士雄 | 田村 昭 | 高上行雄 | 島 英雄 | 長島英太郎 | 国分八郎 |
| 17 | 関谷道春 | 戸渡民雄 | 館田 晟 | 鈴木秋雄 | 中森鎮雄 | 坂本龍雄 |
| 18 | 竹田凱光 | 中溝高好 | 高橋 窃 | 瀬戸口了 | 中山栄男 | 島津衿哉 |
| 19 | 田中芳郎 | 西村 稔 | 近末義弘 | 仙田岑生 | 西本昭夫 | 城 繁博 |
| 20 | 大東信祐 | 二宮隆弘 | 角田泰利 | 高橋久 夫 | 沼田良徳 | 高比康之 |
| 21 | 新島章一 | 原田育賜 | 成田 壮 | 田村秀明 | 野田重雄 | 高橋 清 |
| 22 | 浜野守也 | 平間洋一 | 中川 彪 | 塚田宣伸 | 袴田 宏 | 田中憲明 |
| 23 | 福田光信 | 福田茂記 | 長堀善松 | 中島傳吉 | 林長之助 | 中田光雄 |
| 24 | 福田 守 | 法性 弘 | 林 則行 | 中田悦己 | 平岡克躬 | 中島 晃 |
| 25 | 古木隆志 | 升水貞幸 | 藤井勝利 | 成田保夫 | 平山救馬 | 林 正弘 |
| 26 | 堀内強定 | 松尾捷太郎 | 藤吉圭四 | 林 繁 | 深野 俊 | 蓮見武男 |
| 27 | 真木博夫 | 松山圭一郎 | 堀之内洋一 | 林 嘉彦 | 福山重弘 | 馬場隆春 |
| 28 | 三好八州男 | 神子田正人 | 馬來基成 | 原 善昭 | 堀田恵彦 | 春山文雄 |
| 29 | 山本晃三 | 水上 勇 | 真木和男 | 牧 是清 | 松間昭雄 | 日高和重 |
| 30 | 矢吹 恒 | 水野智之 | 深山明敏 | 松本忠成 | 政狩圭亮 | 平田 侑 |
| 31 | 山下成元 | 森 洋 | 宮井達夫 | 水本幾男 | 村杉秀夫 | 松村嘉夫 |
| 32 | 山崎樹一郎 | 山県哲二 | 守屋 保 | 元島英海 | 元吉俊郎 | 水野雅章 |
| 33 | 吉田宏之 | 吉村浩二 | 山村安人 | 森 弘喜 | 矢吹隼人 | 三好聞治 |
| 34 | | | | 吉沢鶴久 | | |

健在率の比較

事務局

昨年の3月以降9名の同期生が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。一期生の健在率は下表のごとく約60%で日本人男性の平均値の約53%より高い数値になっています。次ページに小隊別逝去・不明者名簿を掲載します。

会報36号（平成28年3月発行）

掲載以降の逝去者（平成29年1月末現在）

| 会員N O | 区分 | 氏名 | 命日 |
|----------|----|-------|-------------|
| 273 | 海 | 元吉 俊郎 | H28. 3. 12 |
| 192 | 陸 | 油井 碩也 | H28. 3. 29 |
| 408 | 小 | 常本 省三 | H28. 3. 31 |
| 28 | 陸 | 遠藤 了 | H28. 6. 3 |
| 201 | 海 | 石川 昭 | H28. 6. 24 |
| 238 | 海 | 田中 治 | H28. 6. 28 |
| 88 | 陸 | 白木 弘敏 | H28. 8. 1 |
| 240 | 海 | 田畑 一朗 | H28. 8. 24 |
| 228 | 海 | 白石 洋介 | H28. 11. 24 |

日本国民男子生存数・平均余命

（厚生労働省資料 H27 年）

| 年齢 | 生存数 | 平均余命 |
|-------|--------------|------|
| | (出生100,000中) | |
| 80 | 62 644 | 8.89 |
| 81 | 59 606 | 8.32 |
| 82 | 56 325 | 7.78 |
| 83 | 52 819 | 7.26 |
| 84 | 49 110 | 6.77 |
| 85 | 45 223 | 6.31 |
| 86 | 41 199 | 5.87 |
| 87 | 37 110 | 5.47 |
| 88 | 33 022 | 5.08 |
| 89 | 28 984 | 4.72 |
| 90 | 25 040 | 4.38 |
| 91 | 21 236 | 4.08 |
| 92 | 17 681 | 3.80 |
| 93 | 14 438 | 3.55 |
| 94 | 11 551 | 3.31 |
| 95 | 9 045 | 3.09 |
| 96 | 6 923 | 2.89 |
| 97 | 5 174 | 2.71 |
| 98 | 3 771 | 2.53 |
| 99 | 2 676 | 2.37 |
| 100 | 1 847 | 2.23 |
| 101 | 1 238 | 2.09 |
| 102 | 804 | 1.96 |
| 103 | 506 | 1.84 |
| 104 | 307 | 1.73 |
| 105 ~ | 180 | 1.63 |

今までの逝去・不明者、健在者の数・比率等

| 区分 | 当初会 員数 | 逝去 者 | 不明 者 | 健在 者 | 逝去・ 不明者 率 | 健在 率 |
|----|-----------|---------|---------|---------|-----------------|---------|
| 陸 | 196 | 57 | 6 | 133 | 32.1% | 67.9% |
| 海 | 82 | 36 | 2 | 44 | 46.3% | 53.7% |
| 空 | 60 | 27 | 1 | 32 | 46.7% | 53.3% |
| 小 | 16 | 9 | 1 | 6 | 62.5% | 37.5% |
| 計 | 354 | 129 | 10 | 215 | 39.3% | 60.7% |

入校時小隊別逝去・不明者名簿

H29.1.31現在

(但し、一期生会会員になっていない人は含まず)

| 11小隊 | | 21小隊 | | 31小隊 | | 41小隊 | |
|------|-------|---------|-----------|------|----------|------|-----------|
| 区分 | 氏名 | 区分 | 氏名 | 区分 | 氏名 | 区分 | 氏名 |
| 陸 | 石松 茂毅 | 陸 | 久我 幹生(中村) | 陸 | 遠藤 了 | 陸 | 國武 宮生 |
| 陸 | 小原 義造 | 陸 | 坂柳 成功 | 陸 | 山崎樹一郎 | 陸 | 瀬戸口 了 |
| 陸 | 前原 輝男 | 陸 | 竹内 俊 | 海 | 石川 昭 | 陸 | 塚田 宜伸 |
| 小 | 難波 清史 | 陸 | 新津 保義 | 海 | 伊東 靖郎 | 陸 | 牧 是清 |
| 小 | 松島 史尚 | 陸 | 西田 晃 | 海 | 久保 建二 | 陸 | 松村 忠成 |
| | 5名 | 陸 | 林 孝恒 | 海 | 鈴木 信吉 | 海 | 稲垣 厲 |
| | | 陸 | 松浦 育郎 | 海 | 鈴木富士雄 | 海 | 近藤 忠男 |
| | | 陸 | 油井 碩也 | 海 | 古木 隆志 | 空 | 伊藤 茂 |
| 12小隊 | | 海 | 白石 洋介 | 海 | 山下 成元 | 空 | 島 英雄 |
| 陸 | 楠元 惇之 | 海 | 中津川秀明 | 空 | 青柳 隆郎 | 空 | 仙田 岑夫 |
| 陸 | 上瀧 巖 | 海 | 松本 克彦 | 空 | 江澤 陽二 | 空 | 高橋 久夫 |
| 陸 | 四宮 勝 | 空 | 鈴木喜一郎 | 空 | 福田 光信 | 空 | 田村 秀昭 |
| 陸 | 馬場 隆春 | | 1 2名 | 小 | 佐藤 庸男 | 空 | 中田 悦巳 |
| 陸 | 渡邊 政直 | | | | 1 3名 | 空 | 吉澤 鶴久 |
| 海 | 佐藤 正 | | | | | 小 | 大崎 皓 |
| 海 | 南任 靖雄 | 22小隊 | | | | 小 | 成田 保夫 |
| 海 | 馬場 駿快 | 陸 | 上野 秋生 | 32小隊 | | | 1 6名 |
| 海 | 村上 好和 | 陸 | 北村 博 | 陸 | 石井 忠司 | | |
| 海 | 米山 治道 | 陸 | 守屋 義弘 | 陸 | 香川 武瑛 | | |
| | 1 0名 | 海 | 田中 治 | 陸 | 小出 知幸 | 42小隊 | |
| | | 海 | 長谷 常俊 | 陸 | 佐々木 直 | 陸 | 伊藤 政美 |
| | | 海 | 宮川 正四 | 陸 | 西村 稔 | 陸 | 近藤 一視 |
| 13小隊 | | 海 | 山根 正和 | 陸 | 原田 育賜 | 陸 | 坂本 文雄 |
| 陸 | 小出 雄一 | 空 | 梅根佐久郎 | 海 | 升永 貞幸 | 陸 | 中森 鎮雄 |
| 陸 | 澤井 隆秀 | 空 | 小林 泰義 | 海 | 水上 勇 | 陸 | 西本 昭夫 |
| 陸 | 鈴木 英夫 | 小 | 櫻井 茂 | 海 | 山縣 哲二 | 陸 | 福山 重弘 |
| 陸 | 高橋 洋治 | 小 | 畑田 勲 | 空 | 田中 康夫 | 海 | 佐久間 一 |
| 陸 | 平井 進 | | 1 1名 | 空 | 森 洋 | 海 | 佐藤 芳夫 |
| 陸 | 藤岡 隆 | | | | 1 1名 | 海 | 元吉 俊郎 |
| 海 | 佐々木 良 | 23小隊 | | | | 空 | 鹿島田 矩基 |
| 海 | 竹内誠一郎 | 陸 | 岡村 忠重 | 33小隊 | | 空 | 寺崎 洋一 |
| 海 | 馬渡 利臣 | 陸 | 岡本 光正 | 陸 | 石山 晃 | 空 | 林 長之助 |
| 海 | 湯浅 彊 | 陸 | 鯉沼 義則 | 陸 | 小野 勇 | 空 | 平山 救馬 |
| 空 | 浦川 正 | 陸 | 杉浦満壽男 | 陸 | 小野寺 勇 | | 1 3名 |
| 小 | 常本 省三 | 陸 | 園川 清 | 陸 | 河合 一郎 | | |
| | 1 2名 | 陸 | 中部 普行 | 陸 | 倉蘭 貞夫 | 43小隊 | |
| | | 陸 | 藤戸 誠三 | 陸 | 白木 弘敏 | 陸 | 石原 敬之 |
| | | 陸 | 松山 省二 | 陸 | 林 則行 | 陸 | 大橋 丈夫 |
| | | 海 | 田畑 一朗 | 陸 | 堀之内洋一 | 陸 | 小谷 章 |
| | | 空 | 前田 武彦 | 海 | 住田 剛 | 海 | 大嶋 直光 |
| | | 小 | 北原 明 | 海 | 高上 行雄 | 海 | 島津 矜哉 |
| | | 小 | 山崎 秀夫 | 空 | 鈴木 龍生 | 海 | 中田 光雄 |
| | | | 1 2名 | 空 | 高野 博(大江) | 海 | 三好 聞知 |
| | | | | | 1 2名 | 空 | 石塚 鏡司 |
| | | | | | | 空 | 尾坪 祐三 |
| | | | | | | 空 | 林 正弘 |
| | | | | | | 空 | 春山 文雄 |
| | | | | | | 空 | 山中 龍雄(坂本) |
| | | | | | | | 1 2名 |
| | | 合計 139名 | | | | | |

アサヒグラフ (昭和 28 年 6 月 3 日号)

竹 田 凱 光

先日の市一会の新年会で、今度の会誌は防大卒業 60 周年記念号とするとのことでしたので、役に立つかどうか分かりませんが、保安大学校開校直後を取材した「アサヒグラフ」(昭和 28 年 6 月 3 日号)を送ります。「カメラ保安大学校に入る」という記事が載っています。

当時、3 中隊の誰かが購入して回し読みしたあと(だからボロボロ)、たまたま小生の写真が載っているという理由で、「おまえにやる」と言われて預かった記憶があります。

終活で捨てる書類に分類していたのを引っ張り出しました。写真の質は良くないけれど、登下校の様子や、大食堂での食事の様子は珍しいのではないかと思います。点呼に駆け出す様子が制服なのは、ヤラセでしょうかね。



当時 定価 40 円



(このアサヒグラフは B4 版のため、A4 版の本会報に縮小して掲載すると、字が小さくなって読めなくなるので、一部の写真のみ次ページ以下に掲載します。 編集担当)

カメラ

保安大学校に入る

明日の保安隊、警備隊の幹部を養成する保安大学校が、神奈川県横須賀市久里浜に開設されて一ヵ月余。現在、新入学生四百名は、四個中隊、十二小隊の学生隊に編成され、かつての海軍工作学校兵舎を利用して全員寮生活、また保安隊久里浜駐屯地内の仮校舎へ通学、陸士・海兵の戦後版ともいえる環境の中で、新軍人への道を励んでいる。立襟でジャバラのついた紺色の短い上衣、桜の花の上に鳩のとまった帽章のついた制帽、これに短剣を吊れば全く昔の海軍兵学校を思い出させるのが、この大学生の制服である。はじめ一週間ほどは不安定な気分だったという学生達（平均年齢十九歳）が、今では総選挙による保守党の勝利にはつきりと支持を表明するまでになっている。教官の指導が漸進的な精神訓育を旨にしている、というのが現段階だが、学校組織の中で教務部（教養・専門両学課担当）に対して、訓練部の位置が重要視される所は、他の新制大学に見られない特殊学校としての面目はつきりと物語られている。なおこの官費学生に対しては、更に月三千円が手当として支給され、現在兵は卒業後の就職義務は強制されないとされている。



現在の大学は保安隊駐屯地隊と同居 学生は隊伍を整えて登下校の時 保安隊の門衛司令と歩哨に挙手注目の敬礼をする 学生達は来春四月久里浜小原台（八万一千坪）に予定されている新校舎に移転するのを心待ちにしている様だ

旧海軍時代から13年以上もコックをやつて来た随方は「現在の食事は マァ昔の準士官と下士官兵との中間でしょうナ もとは一日 2,800カロリーでしたが 今は平均 3,200カロリー 贅沢な方ですよ」もつとも食事の仕方 内容について食欲の旺盛な学生の批判はまちまち



起床と同時に学生達は寝具をたたみ 床の靴までベッドにあげて外の点呼に出る 点呼後掃除がある 靴の手入 便所掃除はないが 土曜日には内外の大掃除 集団生活になずまない学生はここでも批判的だ「大学まで来て 掃除やらされるとは思わんでしたよ」



毎日の課業は午前六時半から午後三時半まで（土曜は半日）制服着用 貸与のスック製カバンに教材を入れて整列 校舎へ向う 夕食後に制限区域内の散歩はあるが 外出は日曜だけ 新制高校を出たばかりの年齢の学生にはこの日課は相当の負担の様である



《説明文》 幹部教育の趣旨から、学生への命令伝達には一週間交代で各学生が勤務する。毎土曜日の午後に上番下番の勤務学生が指導官の司会で批判会議をひらく。ここで民主的な発言が展開されるが、その目的の多くは学生の漸進的な精神訓育にあるようだ、この「勤務学生会議」が大学の一番の特色で、同席上の発言の一例（学生）「命令を強引にやれといわれますがわれわれ同年配の間ではとても自信がありません」という学生の悩みに対して、（教官）「命令と服従の関係については結論は出さない。これは諸君自ら悩んでもらいたい問題である」

小原台堡壘について

大 東 信 祐

京浜急行の馬堀海岸駅から防大に向かう道路が坂道にかかるころの右側に馬掘小・中学校があるが、ここは陸軍野戦重砲兵学校の跡であり、我々の学生時代には正門横に表門歩哨の哨所が残り、当時の兵舎が教室として使われており、道路から谷を挟んだ向こう側の小丘に当時の将校集会所の建物がそのまま残っていた。現在重砲兵会が建立した「陸軍重砲兵学校跡」の碑が建立されている。

当時、小原台は重砲兵学校の演習場として使用されており、個人的な事になるが、幹部候補生として重砲兵学校で教育を受けた私の叔父から当時の第二大隊のあたりに花立堡壘に近い規模の堡壘があった話を聞いた事があった。また、電気学館の西側の台端にあった鉄骨のアンクルの柱が小原台での測角基準点であり、BOQ（当時）の手前にあったRC二階建ての建物が八八式海岸射撃算定具の教場であったという話を聞き、走水小学校と旗山崎との間の砂浜の海岸が三八野砲の射場で猿島方向を、台上に15加を据え、対岸の館山沖の浮島方向に射撃をした等の話を聞き現在との差異の大きさに驚かされた事があった。我々の学生時代は朝鮮戦争の気配がまだまだ生々しく残っており、旗山崎から対岸の富津方向に米軍の防潜網が設置されていた時代であった。

私どもは学生時代に寝室側の窓から花立堡壘の構造物を日夜眺めていたが、小原台堡壘については防大の施設建設の際に破壊埋設したという事をかすかに聞いたような気がするのみであった。

たまたま、軍事史学 2013 年 3 号（通巻 192 号）の「研究ノート」に防大の濱田秀氏が「東京湾要塞小原台堡壘の建設の経緯とその構造の検証」—発掘調査を契機として—という発表があり、また、小原台クラブ会報第 39 号（2015.12）に防大の横山久幸氏が「建学の精神と戦史教育」の中で小原台堡壘について触れている文章があったのでその要旨を紹介する。

日本における砲台の構築は、明治 7（1874）年の調査に始まり、①東京湾口、②紀淡海峡、③下関海峡、④豊豫海峡、⑤鳴門海峡が重視され、明治 12（1879）年に先ず観音崎の工事が開始され、明治 25（1892）年に小原台の工事を完了した。

注 この文章では「堡壘」、「砲台」の用語を次のように使い分けている。

「堡壘」とは、上陸して我が砲台の背面から攻撃する敵に対する背面防禦を目的とするものである。

「砲台」とは海正面の敵艦船を砲撃する任務を持つものを言い、陸正面・海正面両方に対処する任務を持つものを「堡壘砲台」としている。砲台そのものは、火砲を備え付けた砲座（狭義の砲台）及び弾薬庫・観測所・電灯所・掩蔽部（兵舎）その他の附属設備を総称した、堡壘施設もこれに準ずる。

東京湾口の「敵艦船の通航の途絶」のための施設としては

猿島堡壘団（猿島砲台）

走水堡壘団（走水砲台、走水高砲台、小原台（堡壘）砲台、花立台（堡壘）砲台）

観音崎堡壘団（第1～4砲台、南門砲台、三軒家砲台）

海堡団（第1～4海堡）

援助砲台（千代ヶ崎、富津元洲）

からなり、小原台堡壘は「閉鎖堡壘とし、走水南方の高地小原台の北端に設け、観音崎堡壘団及び走水砲台の背後防禦に任ず」とされていた。

なお、横須賀湾口防禦の目的は「横須賀長浦の両湾口を途絶し、且湾内の軍用諸建築物を砲撃せんとする敵艦の動作を妨害する」とされている。

日露戦争においては旅順攻撃のため小原台砲台の28糎榴弾砲等の火砲が搬出されていることも記録されている。

日清・日露戦争の後、「要塞整理」が行なわれ、横須賀湾口直接防備はその必要がないとして撤去を決定した、小原台堡壘は他の堡壘に先駆けて大正2（1913）年撤去が決定され、この際、備砲・格納庫及び監守宿舎は当分の間、防禦造営物に準じ従来の通り保存（後に走水兵舎敷地に移す）すること、および堡壘備え付けの兵器は堡壘外の適当な場所に格納する事等も決められた。

このように小原台堡壘の現役時代は1897年～1913年の16年間であった。

要塞の廃止ということで大正2年度の特別工兵演習の場として小原台堡壘は、対「壕」、対「坑道」による永久堡壘の攻防演習として使用されることとなった。この際、爆薬等の使用による小原台堡壘の破損については復旧しないという申し合わせを行なった。残念ながらこの「工兵特別演習」の資料は残されていない。

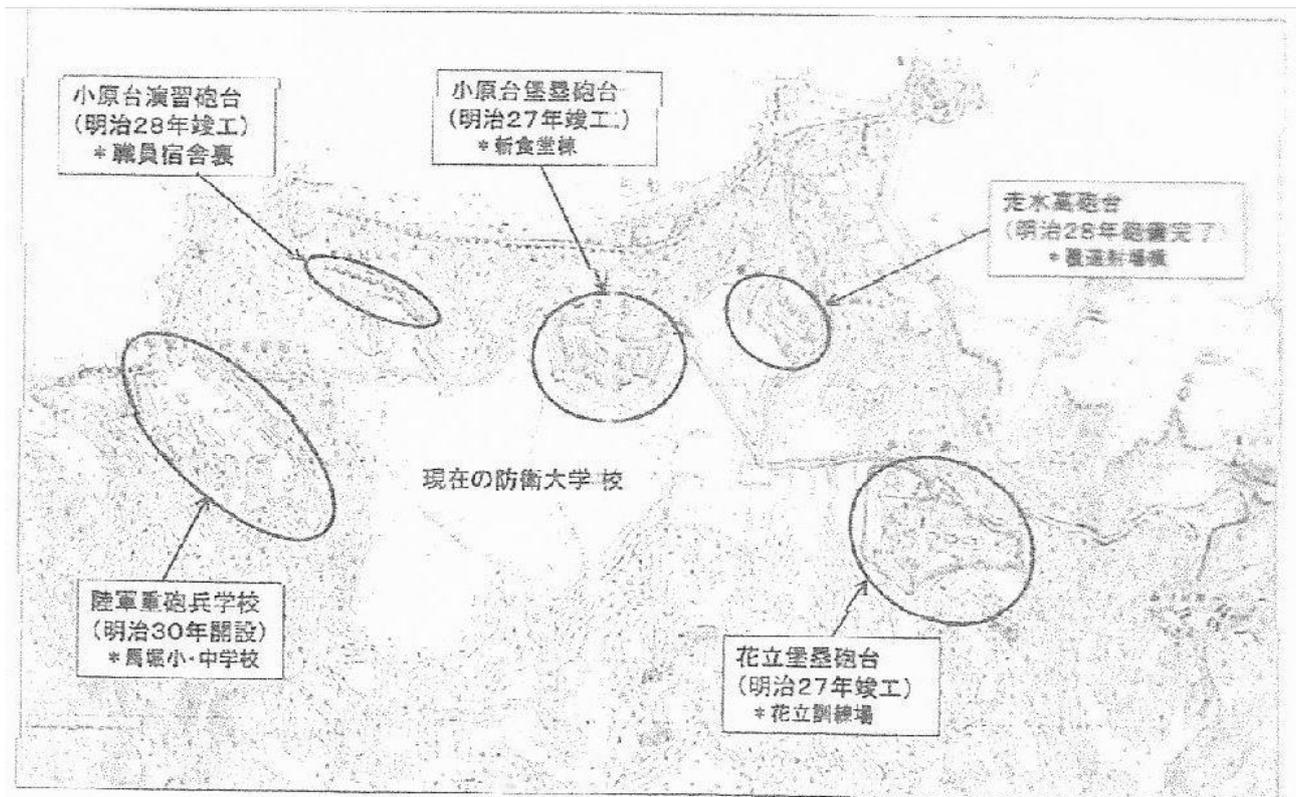
昭和29・1954年小原台に防衛大学校の施設が建設される事になり、これらの砲台群は小原台堡壘（昭和30・1955年）、花立堡壘砲台（昭和55・1980年）、走水高砲台（昭和55・1980年）の順に破壊されていった。なお、演習（小原台）砲台については28糎榴弾砲の砲座は撤去されたものの、12糎加農砲座は現在も良好な状態で残っている。

防衛大学校学生の生活中枢地域（学生舎、食堂、浴場、厚生施設）の再配置に伴う平成15（2003）年度以降の諸工事に伴う調査は、小原台堡壘の遺構を再確認するという

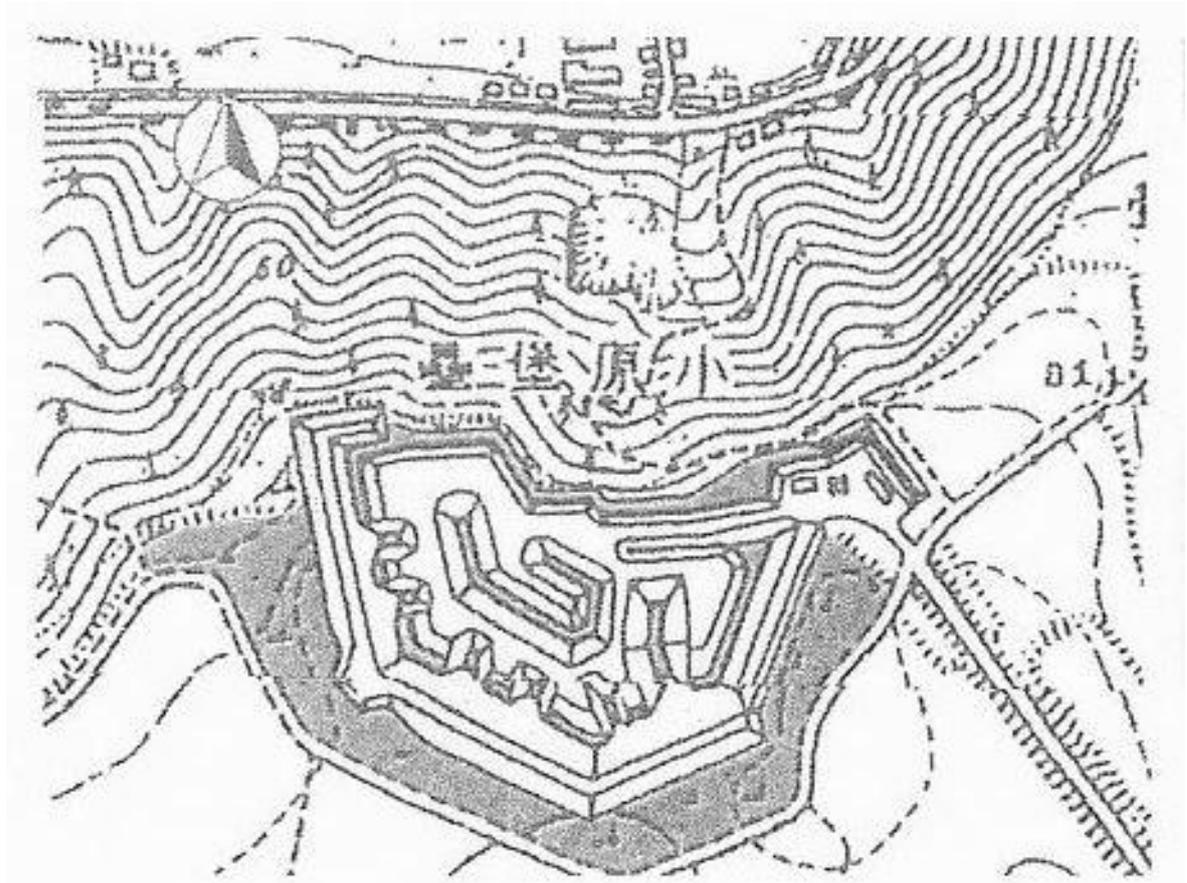
思わぬ副産物を生み出した。

これらの学校建設当初の工事では、地ならしがされ、棲息掩蔽部等はある高さ以上は切り取られ、埋められてその上に学校諸施設が建設されることとなった。これにより小原台堡塁の遺構は「消滅」したかには見えなかったが、堡塁の棲息掩蔽部、坑道、堀等地下構築物は、ある一定の深さより深い部分は埋められたため、その遺構は残存していることが判明した。

小原台地区の砲台群



小原台堡壘の概況



建設以来 100 年を経て実施された平成 23 (2011) 年からの工事に伴う近代埋蔵文化財の発掘調査において変則五角形をなしていた長大な壕や棲息掩蔽部、水利施設等の構造が明らかになり、また大正 2 年の工兵特別演習では堡壘の諸所に爆薬を仕掛け、爆破した跡が見られ、殊に坑道に対する爆破は徹底して実施されたことが伺われた。

小原台堡壘は短命な現役期間に加え、破壊により構築物の存立そのものも危ういものとなっていたことが判る。

これらの調査結果は防大の資料館に「小原台の歴史的概観」の一部として展示されており、横須賀市教育委員会編「横須賀市文化財調査報告書、第 4 2 集」及び公益財団法人かながわ考古学財団の「平成 24 年度発掘調査報告書」に記載されている。

心の故郷は防大

菅 沼 祐 亨

一期生会の皆様早や八十路を超えても、お元気のことと存じ上げます。

私は皆様方と異なり、中途にして防大を去りましたが、我が心の故郷は防大にあり、防大周辺に住んで、あちらこちらと職さがしをしながら、防大の同期生との交際を断つことはできませんでした。

その後も延々と同期生との交友は続き、弁護士開業も防衛庁所在の六本木に開所し、一期生との交友を続けて参りました。

私は中途退学者であり、母校の同窓としての資格を与えられるかどうかもわかりませんでした。この淋しさはどんな大学に再入学しても止まず、防大への想いは、心の故郷でした。

昭和50年代、後輩の防大在籍経験者たちとの交流が生じていた頃でした。

一期生の中森鎮雄君や堀田恵彦君らと相談し、防大在籍経験者のうち当時、防衛庁に所属していない者達で民間団体を作ろうと計画し設立したのが、現在の小原台クラブです。

その小原台クラブの基本理念は防大教育の理念を堅持し、協調、親睦、共助を推進してゆくと云うことでした。

昭和52年に一期生の中森鎮雄君を会長として会員は、普通会员としては現役自衛官でない防大在籍経験者、特別会員としては役員会の承認を得て本会の事業を後援する個人又は法人とし、本会の目的に賛同して入会した者として設立するに至ったものであります。

小原台クラブは単なる酒のみの集りではなく、会員相互の連繋と親睦を図ることを目的とし、講演会、研修会の開催等その他本会の目的とするための諸事業を行う団体として設立することとなりました。

その後40年を経過し、小原台クラブは歴代の幹事、事務局および役員活動と諸会員の尽力により、堅実に歩み続けて参りました。

現在、小原台クラブは防衛大学校同窓会本部の支部となり、組織上は同窓会本部の一員であります。小原台クラブの独自性である民間人の集団としての活動は本部もこれを重要視し、小原台クラブも本部の立場を尊重し、協調、支援という立場を活動の基本としています。

小原台クラブの存在が協調、親睦、共助等の抽象的観念に止まらず、これらの観念を具体化していく組織であることを申し上げたいと思います。その具体例として、例えば会員の1人が事業に失敗した時、これを支援していった同業の会員がいたという事実も

聞き及んでいます。

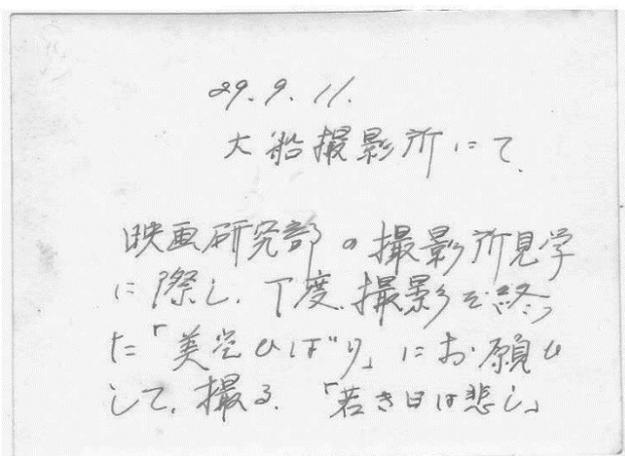
歴史の流れは止まらずに流れてゆきますから、その組織に組する者の心の支えとして機能してゆくことこそ小さな小原台クラブであれ、大きな未来につながる大きな存在価値を有するものだと思います。

具体的な事例を示すことは、プライベートな問題となりますので、差し控えますが、それなりに会員であるという人のつながりが不幸な局面を打開してゆくのも、組織の持つ大きな機能だと思わざるを得ないのであります。従って一つの目的は、我々の義務として、次の時代につないでゆくという考え方は、どうしても必要だと思うのです。

我々一期生としても後に続く人々に接し、人間的な親近感を感じ合い、新しい社会に起る諸問題に協力し合って取り組んでゆくことこそ、大事な老人の役割ではないでしょうか。

埋め草

思い出の写真1



2年生の時の9月に、映画研究部で大船の松竹撮影所に見学に行った時の写真です。たまたま、美空ひばりが通りかかったので一緒に写真を撮ることをお願いしたら、快く受けてくれ、一緒に撮った写真です。右の写真はその裏面で、説明は誰が書いたかわかりません。桃ちゃん（故鈴木英夫兄）が映画研究部の部長でしたのに写っていませんから、写真は彼が撮ってくれたものと思われる。しかし、説明は彼の筆跡ではないとのことで、勿論、悪筆の代表である私の筆跡でもありません。写真に写っている防大生は左から日高・松村・薙野・山本・陸井・松浦・西田？・不明の諸兄です。

なお、この時撮影していた映画は「伊豆の踊子」で相手役は「石浜 朗」と記憶しています。

(山本晃三)

60 年を顧みる

磯谷幸三

一、はじめに

良寛の「半夜」の詩に、「首を回らせば五十有余年、人間の是非は一夢の中……」とあるが、防衛大学校卒業 60 年を顧りみての記念文集の企画、まことに適切と感謝しています。自分の回顧はもとより、同期生の所感を、今から楽しみにしています。

二、学生時代

久里浜の保安大学校に入校以来 64 年、軍学校の中に、学生の自主意識の涵養を目指して、学生の学生による学生のための校友会の創設に情熱を傾けた頃を懐かしく思い起こしている。校友会（第 1 期副委員長、第 2 期委員長）、代議員会（第 1 期議長）、運動部としては、山岳部で北アルプス（槍ヶ岳・穂高岳）、南アルプス、八ヶ岳縦走を経験した。文化部では、社会科学研究部長として榎校長先生のゼミナールを企画し、他大学の学生とも交流した。「よき紳士、よき社会人であれ」、「ノーブレス オブリージ」等、なつかしいお言葉である。

三、現役時代

九州の久留米、茨城の勝田を経て、北海道の札幌真駒内の第 7 施設大隊に着任、雪祭りの雪像作りを小隊長として体験した。また、初の部外工事作業隊長として、小樽の松ヶ枝中学校のグラウンド造成工事を担当した。昨年夏、北海道旅行時、このグラウンドを訪ね、半世紀後の様子を見ることができ、中学校長から、このグラウンドのお蔭で、軟式野球部が北海道大会で優勝し、全国大会に出場できたと聞かされ、嬉しかった。

中隊長を経て、勝田の施設学校に転属、地雷探知機の開発に従事、続いて、教育部に移動、BOC、AOC の教官、この間防大 8 期主体の BOC 主任教官として、後輩と汗を流したことが忘れられない。次いで、防衛大学校教官に転属、防衛地形学、測量術の他に、冬季は、スキー訓練教官として、毎冬 2 週間、新潟の妙高高原にて学生とスキーで汗を流したことはまことに印象深い。次いで、北海道登別の新編第 13 施設群の副群長に転属、訓練の他、道内の部内外工事の指導を体験した。また、駐屯地を解放して、ママさんテニスを奨励し、隊員、家族、地域の人々との交流を楽しんだ。次いで、技術研究本部第 4 研究所（神奈川県相模原）の築城研究室長に転属、滑走路急速復旧工法の器材と資材の開発、F-15 戦闘機の掩体構築のための耐弾構造研究に従事する。九州の日出生台演習場、北海道の別海演習場が懐かしい。顧みて、充実した毎日であった。

四、退官後

神奈川県のカンパ座間の在日米陸軍図書部アジア研究班に 10 余年在籍した。米軍の情報に対する施策に敬服するとともに米軍人、家族との交流に汗を流した。ハッシュハウス ハリヤー（ジョギングで汗を流した後、ビールで乾杯、歓談）、この世界大会、アメリカ大会に毎年参加し、その数は、インドネシアのバリ島での世界大会を皮切りに 13 回に及んだ、アメリカのサンディエゴ、ミルウォーキー、フロリダ、タイランドのパタヤビーチ、ブーケット、カナダのカルガリ、ニュージーランドのロトルア、地中海のキプロス島、カリブ海のトリニダードトバコ、マレーシアのクアラランプール、オーストラリアのタスマニア、そしてインドのゴアでの世界大会を体験し、多くの友人に恵まれた。

冬には、スキーのインストラクターとして、苗場、湯沢で、カンパ座間に在住のアメリカの軍人、家族にスキーを教え、夏にはカンパ座間のプールでライフガードとして、水泳を教えた。思い出すのも楽しい日々を過ごすことができた。

五、八十歳となって

耳が遠くなり、筋力の衰えを実感している。心残りではあったが、今まで楽しんだスキー、テニス、マラソン、水泳を断念したので淋しくなったが、「出来ないことは諦め、出来ることを楽しむ」、自分主体の日々を送っている。そのため、運動は、早朝のウォーキング、狭庭の管理（剪定、芝刈、菜園）で補い、食事は、妻の手作りの料理で、減塩、減糖に努め、睡眠は、夜 9 時就寝、朝 5 時起床の日課を守っている。また、地元の公民館で詩吟教室、俳句教室の講師として教え、かつ皆様と楽しんでいる。

六、おわりに

昨暮、高校同窓会の忘年会で、アメリカ在住の桂子・ジョンソンさんから、80 歳からこそ、自立のためのトレーニングが必要との助言を受けた。それから、恋をすべしと、自分好みの美女を褒め、励ますこと、若人を賞賛すること、そして、小言は厳しいが、誰よりも面倒を見てくれる私の選んだ妻に心から感謝し、筆を擱く。

註 ハッシュハウス ハリアーズ とは

ハッシュハウス ハリアーズは競走ではなく、楽しむ事を目的としたクロスカントリーとオリエンテーリングとを混ぜた様なランニング ゲームで、英国が発祥の地です、「ゲームの後でビールを美味しく飲むため」にこのゲームを考案したと言われます。世界 160 ヶ国以上に支部があり、国内にも神奈川、栃木、愛知、広島、長崎、沖縄等 10 以上の支部があります。また、毎年世界大会が開催されており、世界中のハッシュヤーとの交流を楽しんでいます。

自衛官人生の岐かれ路

陸 井 益 三

昭和 32 年に防衛大学校を卒業して以来、60 年を経過した。その間 354 名の同期生はそれぞれの人生を過ごし、既に 129 名の仲間(H28. 12 現在)は人生を卒業し黄泉の里へと旅立っていった。我々は保安大学校(昭和 28 年)に入学したのが一般の人と異なる人生の最初の岐かれ路であった。自分自身の人生を振り返り、その過程において様々な分岐点があり、自分史のような記述になり申し訳ないが卒業後 60 年の陸上自衛官としての人生を振り返りたい。

1 保安大学校への入学

高校 3 年の秋、友人の一人が今度こんな大学ができるが受けてみないかと誘われ大学摸試のような気持ちで受験したのが、わが自衛官人生の始まりであった。母子家庭に育ち、高卒で就職も考え関西の大手銀行を受験したが、最終的に保証財産がないとのことで振られた。姫路駐屯地での一次、伊丹での二次試験を経て保安大学校の合格通知を受け、手当をもらいながら理科系を勉学し、全寮制で費用いらずの大学であるとのことで入学を決意した。残念ながら誘ってくれた友人は不合格であった。久里浜に着校、入校式、続く入校訓練など昨日のように思える。

2 自衛官としてのスタート

防大では陸上要員としての訓練を受け専攻は化学その恩師も昨年ご逝去された。昭和 32 年 4 月陸上自衛隊幹部候補生学校に入校、陸上自衛官としての訓練を受け卒業、職種(兵科)は野戦特科、富士学校で幹部基礎課程を受講、卒業後姫路の第 3 特科連隊に勤務した。昭和 35 年陸上自衛隊は将来のミサイル部隊の要員を募集した。ロケット燃料の勉強をしたいと応募、選考に合格し、高射学校に入校した。

3 交通事故と陸上自衛隊に残留

昭和 35 年、特別集合教育に参加中、外出からの帰路交通事故にあい入院約半年の加療後退院、ロケット訓練隊要員から外され、高射学校所属となり第二の人生分岐点となった。職種の変更である。将来のため防大幹部は電子技術の習得が必要であるとの学校長の方針で、武器学校の幹部射統技術課程に入校し基礎電子・レーダー・計算機などを勉強した。その後米留要員とのことで調査学校に入校し英会話のブラッシュアップに努め、



MAGJ(軍事顧問団)の試験に合格、昭和 37 年米留に出発となった。米陸軍防空学校ナイキ射統整備・ナイキシュミレータ整備コースに約一年間同期の故石塚鑛司兄と二人で単独留学をした。若年幹部の時代はこのような色々な場所で勉強をさせられ、技術の習得



に努めたのであった。

(注：ナイキとはナイキ地対空ミサイル(SAM)システムであって、現在活躍中のペトリオット SAM システムの前身である)

米留中に、当時ナイキの帰属で陸上と航空がしのぎを削り、内局裁定で航空に決定された。(米国は陸軍、ドイツは空軍) これにより 10 名の陸上の仲間(堀内強定・田中芳郎兄他)が航空に転官をさせられた。ナイキを勉強したので当然航空へ転換と思っていたら当時の高射学校長がこれ以上陸の人員を航空に転官させない、陸井は陸上に残れと決定され 人生の大きな分岐点となった。

4 その後の人生

爾来、陸上の仲間と同様に司令部幕僚、学校教官、部隊指揮官などの補職で勤務し陸上自衛官としての人生を全うした。退官後は陸幕援護室の勧めで、防衛産業の某社に勤務、部隊と企業間の仲立ちとして働いた。この会社の退職にあたり海上OBの方が特許庁の調査員を受けないかと勧められ受験、幸甚にも合格し特許分類調査委員として非常勤で 70 歳まで勤務し、特許実務を習得した。今は庭の手入れと家庭菜園及び漢詩の勉強に癒しを求めている。

5 人生に影響する重要な要素

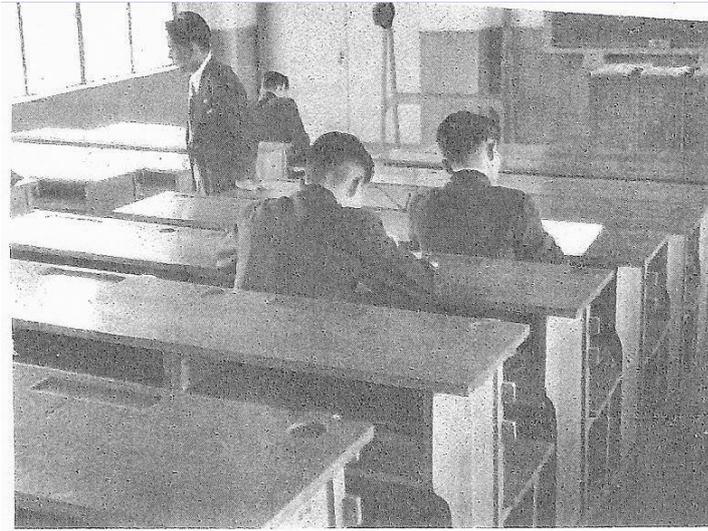
人生の伴侶としての連れ合いの選定が男の人生に大きく影響する。悪妻は 60 年の不作との諺があるが、同期諸兄の伴侶は才色兼備・良妻賢母型の女性であり悪妻は聞いたことはない。さらに人生の終末において考慮するのは終の住処である。退官 3 年前に現在地に住居を定め、将来子供たちに迷惑を掛けないようにと 15 年前に同じ市内の寺に墓地を求め終の棲家としている。

上述のように人生は自律的で決める進路と、他律的に決められる進路があり、夫々に人生をエンjoyしなければならぬと思った。

出来もしないくせに、ねばること……

久保田裕士

防衛大学校卒業記念アルバムの期末試験コーナー写真に答案用紙を前にして机にしがみついている自分を発見した。場所は、応用化学階段教室だ。その写真の下のコメントが表題である。



写真は後ろ姿なので、最初は誰か他人の後姿と思ったがよくよく注意して見るとまさしく自分だった。正直嬉しいような悲しいような奇妙な気持である。

そのかたわら、こうして卒業 60 周年記念号に一期生の一員として投稿できる喜びも味わっている。

また卒業記念アルバムの作成を担当された同期の諸兄の皆々

様に改めて心から御礼を申し上げたい気持で一杯である。

話は変わる。

故「馬渡 利臣」君は、佐賀中学・新制佐賀高等学校そして防衛大学校の同期の桜である。5月31日が命日だ。他界されてから早くも10年が過ぎようとしている。

その彼と卒業前に大東亜戦争の敗因についていろいろと話し合った。その中で今でも鮮明に記憶に残っている事がある。それは昭和17年6月15日生起の「ミッドウェー」海戦の大敗北についてである。

彼は言った。航空兵力、飛行機の性能、搭乗員の技倆や……すべて日本海軍が上回っていたにもかかわらず、正規空母4隻を一挙に失う大敗北を喫したのは

- ① 戦術に「簡明の原則」がある。それに明白に違反している。敵機動艦隊の撃滅とミッドウェー島の攻略占領と二兎を追っている。「二兎を追う者は、一兎をも得ず」だ。先ず敵機動艦隊の撃滅に総力を上げて、専念集中すべきではなかったか。「当面の目標」を絞って簡明に示すべきではなかったか。
- ② 先の大戦は、太平洋の制海権と制空権の争奪戦だ。その帰趨がすべてを支配する。
- ③ 山本聯合艦隊司令長官は、戦場海域に率先進出して陣頭指揮すべきではなかったか。同期生として彼の意見に全面的に賛成した。そして彼は、海上自衛官を選択希望して

卒業したのである。

享年 74、同志「馬渡 利臣」君の早すぎる旅立ちであった。改めて心からご冥福をお祈りするとともに、この世の無情を痛感し、あの世での再会を楽しみにしている今日このごろである。

私は一期生で良かった

堀 内 強 定

今年も平穏で幸福な正月を迎えることができた。これは社会人生活を通じて働いた各所で、上司、同僚、部下、後輩の皆さんに支持されて、大過なくやってきた成果と自負している。同期の皆さんも同じだと思うが、活動していた全期間を通じて多方面の職務を経験させてもらった。

初級幹部の頃、施設科部隊の小隊長等として従事した訓練、演習や災害派遣の現場、クラブ活動でやっていたラグビーの練習や試合の時、直面する事象をどうするか判断や決心に迷った時、「防大一期はどうすれば良いか」と考えるのが何時頃からか習慣となってきた。

私は自衛官としては施設科の小隊長等、野整備部隊の整備幹部や輸送班長、陸自から空自への転換、空幕教育課、新編高射部隊長をやり、その後は、補給本部と補給処の後方機関の管理職に就き、空自第四補給処の副処長を最後に退官した。その後、民間企業 NEC の関連会社に就職し、取締役工場長として管理職をやらせてもらった。入社直後に工場建設が計画されたため建設委員としても従事した。最後は NEC 孫会社の社長をやらせてもらっていた。

施設科の小隊長でスタートした私の社会人生活は電気会社の社長で終了したが、この間に直面した問題は非常に多種多様で、予備知識もなく、経験もないものが多かった。こんな時「防大一期はどうする」と自問して、妥当な判断を導き適正な決心をするように努力した。この事が周辺の人に受け入れられるものになったものと思う。その意味で「防大一期であった」ことに助けられて今日がある。この後何年生きられるか判らないが、これからも事毎に「防大一期はどうするか」と自問しながら生きようと思う。正に「防大一期で良かった」人生である。

昔と今で思うこと

阿 部 順

治

60年間の主たる勤務・活動については多くの陸上同期生諸兄と共通事項が多いと思われるので、初期と末期の思いのみを挙げてみる

1、久里浜時代の思い出

(1) 10代の青春

一般の若者には学生＝青春時代などと言われるが私達には「青春」はあったのかどうか振り返ると、その時は無意識だったが確かに「あった」と思われる。

田舎の高校生から入学した時には同期生といえども年齢差、経歴・社会性など千差万別であり思想、生活、信条、金銭感覚などバラバラで友人関係も手探り状態だった。

しかし全員学生舎での共同生活の中には「憲法論議、世相談義、マスコミ逆風など」の表面的話題ばかりで無く、隣人(ベットの近い)間では横須賀・東京などの遊び情報、女性に関する話題、ときには文学(漱石からトルストイまで)、「自由と規律」など若者としての知識の交流は静かに行われていたと思う。土日は外出(時間外はランニング・スタイルでOK)して湘南・横浜・東京と名所観光、観劇、飲食などで門限ぎりぎりまで遊び呆けることも出来た。団体生活の束縛とか圧迫感はあまり強くは感じなかった。むしろ普通のアルバイト学生よりは閑も小遣いも余裕があったかもしれない。今考えても「我が青春」と言える。

(2) 指導官(陸士・海兵出身)の訓育とわが決意

純真・素朴の少年達に多くの指導官たちから「武人の心構え」「指揮官・将校の心得」「慕われる隊長像」など機会あるごとに訓話・指導を受け、軍隊・戦場を知らない若者たちも少しずつ感化されて愛国心も芽生えて成長していったと思われる。

この間教官たちは戦後の若者に気遣いして強制・威圧にならぬように気遣いしてソフトに語りかけていたと思われる。私なりに受け止めた要旨は

①まず個人が「軍人としての職務に応ずる知識・技能を修得し、現場で発揮出来ること」

②精神・人格など武士道精神を修養していること

③ さらに指揮官として統御、責任感、慈愛

などリーダーシップの発揮に努めることなどであつた。

私個人としては「武人の覚悟と統御」が核心であり、これだけは習得・実践せねばならぬと決意した。また「部下との絆」は終生続くと大切にした。当時の指導官は選抜さ

れた人格・識見ともに立派な方々であり今なお尊敬している。特に長嶺・澤山・横山指導官に薫陶を受けたことは恩師の没後までも感謝している。

2. 老年時代の覚悟

(1) 傘寿もとうに過ぎ、残された平均余命は七年余である。これからどうすれば良いかと考えるだけでなく「あと何がしたいか、どう有りたいか」と終活も考えて、両面活動が望まれる。今なお、まだ若さとやる気が少し残っているとすれば毎日の暮らしにおいて加齢、老化、病気ばかりを心配して閉じこもること無く、むしろ「歳を忘れて、老化現象の初体験に取り組み「スローライフ」とか「一病息災」とか前向きにとらえて適応していく」したたかさが望まれる。

私自身もまだ元気な数年のうちに偕行社活動を仲間と共に楽しみ、後継者を育てて引き継ぐなどそれなりに分相応で活動しています。

(2) その後は万人必然の「病・死」と対面するが「覚悟して悩まず」受け入れたいと念じています。どうすれば「安心」するか・なれるかについて二十余年間読書・受講・参籠など努力いたしましたがいまだに「悟る」には至りません。

これまでの研修では

- ①自分の「これまでの人生」に満足していること
- ②毎日の暮らしにおいても「生きがい」を感じていること
- ③未来については「来世が有る」と信じる人、あるいは「ない」と否定する人、いろいろだが自己の信念を持つことなどを総合した思想・信念を備えた方々が「安心」に近いように感じられます。

私自身は上記の3要件を信じて見習い、終末期を「こころ安らかに」暮らし、最後は「阿弥陀如来」のお迎えを待ちたいと念じております。

以上

退官後の成果と人生を変えた二つの資格

樋口和彦

1. 退官後の成果

昭和28年4月 久里浜の仮校舎に入校し、多士済々の13小隊に所属を命ぜられた。この時の全財産は下着、日用品等を入れたボストンバックが一つであった。その4年後の昭和32年3月卒業時も支給された衣のうが増えただけで、ボストンバッグ一つが全財産で変わらなかった。それから60年が経過して、自分なりに懸命に生き、努力の結果、多数の有形、無形の資産を得ることとなった。ここでは、主として退官後、28年間に得られた成果を中心に総括すると、次の通りである。

(1) 子供の教育

4人(三男一女)をすべて大学卒業(国立×2、私立×2、うち1名は大学院修士修了)

(2) 退官後の第二の人生

(株)日立製作所 公共営業本部 顧問(8年8ヵ月)、(株)セノン 技術顧問、常勤監査役(6年3ヵ月)、(株)中国技研 顧問(平成28年12月15日に退職)(13年3ヵ月)

(3) 公的役職

公益財団法人 日本電気技術者協会 監事(12年間)

(4) 叙勲、表彰

瑞宝小綬章、オーム奨学賞(オーム社)、樋口賞(日本電気技術者協会)、日立技術士会賞、情報通信エンジニア資格10年連続更新表彰(日本データ通信協会)

(5) 国家資格の取得

45歳から25年間の自己啓発を励行し、技術士(電気電子部門、総合技術監理部門)、第一種電気主任技術者の二大資格を中心に関連する資格を次々に取得した結果、技術士、電気、通信、エネルギー管理、公害防止、消防設備、建設設備管理等7分野45種の資格を取得し、いずれも「生涯現役」のメシのタネとして活用中である。

(6) 技術士活動

① 特定建設業の専任技術者、監理技術者としての特典の活用

建設業法の特定建設業のうち、電気通信工事業の専任技術者、監理技術者は、事実上 技術士(電気電子部門)の業務特権に近いものとなっており、日立製作所定年退職後はこの特権を活用して、再々就職、再々々就職した。

② 研究成果論文の発表

先端技術の現状と防衛技術への応用・課題、生涯現役への道、ものづくりの体験、電験・技術士の資格活用法等の多数の論文を発表、雑誌掲載

③ 技術士育成支援のための図書執筆等に関するグループ活動

日立技術士会特別会員の皆様とともに技術士第一次試験・第二次試験、電験三種の参考書、問題解答集等 30 冊をグループで出版 のほか、雑誌 OHM に 3 回/毎年 技術士第一次・二次試験問題の解答・解説を掲載 (いずれも共同執筆、オーム社刊)

④ 技術士受験講座の講師

日立技術士会等主催の技術士受験講座の講師を担当し、後進の育成に努力

⑤ 記念出版

父の一周忌、退官時、叙勲受章時に記念として自家出版し、皆様に配布

(7) 新しい人脈の構築

資格活用のために、資格に関連する会合、懇親会に積極的に参加し、最初のうちは懇親会のテーブルの隣の方と名刺交換だけのときも多かったが、新しい知り合いを構築しつつ親交を深め、技術情報の収集、図書執筆や再々就職等に活用中である。

(8) 不動産の取得

土地付戸建住宅×2、3LDK マンション×3 計 5 軒

(9) 趣味

相模川の鮎釣り、年間千尾を目標に 70 歳まで実施 (概ね目標を達成)

2. 人生を変えた二つの資格

昭和 63 年 8 月 1 日 仙台で定年退官。この時点での国家資格は 19 種を保有していたが、名刺に書けるほどの資格はなかった。退官 3 日前に第二種電気主任技術者試験 (以下 電験二種) の筆記試験を仙台で受験し、結果はわからぬままに退官したが、10 月には筆記試験合格、11 月 口頭試験を東京で受験、12 月には「電験二種」の合格通知を受け取ることとなった。ここで、「電験二種」の最大のメリットは、都内の高層ビル、大きな事業所、工場等の受電所の電気主任技術者として勤務でき、最近では、メガソーラーを 66 kV と系統連系するため「電験二種」の資格が必要であり、その需要が高くなっている。身近な例では、防衛庁がある市ヶ谷駐屯地の電気主任技術者は「電験二種」である。従って、一般社会では、「電験二種」で十分で、「電験一種」は主として電力会社で必要なものであるが、技術力の客観的評価のステータス・シンボルとして重視されている。

平成元年から「今後の目標を何にすべきか、生涯現役を目指し、メシのタネになるものは何か」を熟慮し、自分の学力、能力、経験から実現の可能性のあるものを目標として選定することにした。その結果、「技術士(電気電子部門)」と「第一種電気主任技術者」の二大国家資格の取得を最終目標に選定し、平成元年から目標奪取作戦を開始した。ここで、当時の合格率は、技術士は約 20%、電験一種は 3% で、極めて厳しいことは知っていた。

(1) 第 1 目標 技術士 (電気部門)

昭和 58 年度の技術士法改正により、技術士補試験 (現在の技術士第一次試験) が創設

された。昭和 59 年度に試験内容は全く未知のまま受験して合格し、技術士補(電気部門)に登録。その後、受験の機会がないまま、昭和 63 年 8 月 日立製作所に入社後に日立技術士会の指導を受け、平成 4 年度に 3 回目の受験により、58 歳で技術士(電気部門)に合格。これで片目があき、平成 14 年には、技術士(総合技術監理部門)に 68 歳で合格した。

(2) 第 2 目標 電験一種

電験一種は強電関係の最高位に位置付けられる国家資格で、私が受験当時、明治以来の合格者総数は 600 名足らずであった。当時の試験は 6 科目 (現在 4 科目に統合) で、その内「理論」、「電気機械」、「電気応用」の 3 科目は防大電気工学科で学習したが、残りの 3 科目「発変電」、「送配電」、「電気法規」は、大学院では通信工学を専攻したので、全く未学習、見たことも聞いたことも経験したこともない科目で悪戦苦闘の連続となった。

この状態で幸いにも、日立製作所の顧問研修会で各事業所の電気機械・設備等の製造現場で現物を視認する機会を得た。そして、通勤電車内で専門書 50 頁/日を読破しつつ自己研鑽を努めていった。平成元年から 6 回目の受験後、平成 6 年度に 60 歳で電験一種に合格。これは旧試験制度下の最後の試験で、当時は、明治以来の最高年齢の合格者であった。まさに気の長い努力研鑽による涙の栄冠である。

平成 7 年 2 月 1 日には、オーム社から「オーム奨学賞」と「電験一種合格記念」の楯が贈られてきた。その文面には、「多年の努力研鑽の功を遂げ、平成 6 年度第一種電気主任技術者の国家試験合格相成り、受験者の鑑みとして顕彰するに足るものと認め・・・」とあり、感激の極みであった。そして、雑誌「OHM 平成 7 年 2 月号」に「平成 6 年度電験一種合格者」として本人の写真付きで紹介され、さらに喜びが大きいものとなった。

(3) 最強のダブルライセンス

ここで「技術士」と「電験一種」のダブル取得は、電気関係では、最強の技術ライセンスの組合せで、最高のステータス・シンボルとして技術力の客観的評価が著しく向上し、これが「私の人生を変えた二つの国家資格」となった。日立製作所定年退職後の再々就職。再々々就職がスムーズにできるとともに技術士育成活動等の社会貢献について真に役立つ資格となり、メシのタネとして活用することとなった。

3. 人生百年時代を目指して

現在 82 歳、「百歳まであと 20 年足らずの人生をどう生きるか、生き甲斐をどこに求めるか」が当面の懸案事項である。現在の技術士活動は 85 歳まで継続し、それ以降は後進に道を譲る所存である。85 歳以降は、健康で認知症にならない限りどうするかを模索中である。特に、現在 105 歳の日野原重明先生の「105 歳・私の証 あるがままに行く」を参考として今後の行動方針を検討中である。80 歳以降、知力、健康、財力、時間を十分に持った人生最良の時期を迎え、人生百年時代を目指すためには、

第一に 心身の健康を保つこと

第二に 何時までも知的好奇心と探求心を持ち、新しい知識を吸収・活用すること
第三に 社会貢献、情報発信に努め、世のため、人の為に少しでも尽力すること
と考えており、自ら実践中で、引き続き継続すべく努力している。

埋め草

第2世の活躍

私は一昨年夏から左耳難聴・耳鳴り・眩暈に悩まされてきた。昨年はリウマチにもなり、昨年は会合等にほとんど出ることができなかった。

偶々、1期生会の役員を交代した藤井勝利兄から「稲垣厲兄の名前の読み方を同窓会から問い合わせがあり、どう読むのか」との電話があった。「きびし」と読むと記憶していたが、JR辻堂駅の近くで稲垣兄の令息が耳鼻咽喉科医院を開業していたのを思い出し、そうだ診察を受けその時に稲垣兄の名前も確認すればと思い立ち、すぐにインターネットで調べてみたら、評判がよく耳鳴りが治ったとの書き込みもあった。稲垣兄から生前、令息が東工大を卒業した後、慈恵医大に入り医者になったことを聞いていた。

早速、あいあい耳鼻咽喉科医院（稲垣幹矢院長）に連絡し診てもらった。懇切丁寧な診察で漢方も含む薬をもらった。診察が終わった後、稲垣兄の名前の読み方を確認した。その後、お陰様で、耳鳴りも軽くなり、気分がよくなり、会合等にも出席できるようになった。今後も続けて診察を受ける予定である。ただ、再診の予約を取るのが難しい。インターネットか電話で行うがすぐに一杯になり、なかなか取れない。それだけ評判がよいのである。

（高山雅司）

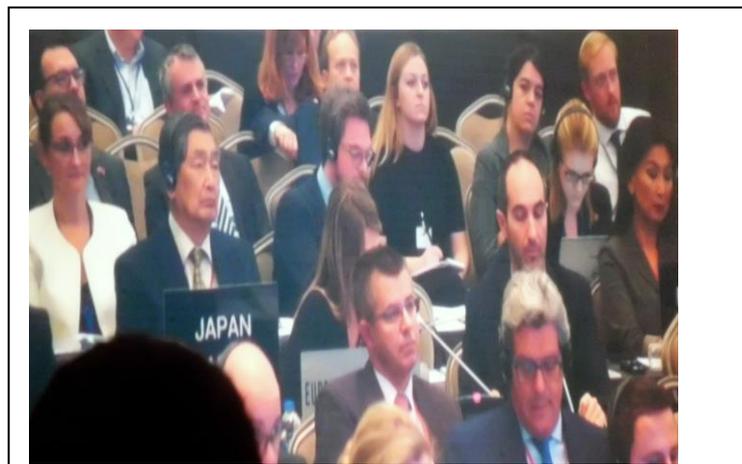
NATO 加盟国国会議員会議（NATOPA）から感謝状

二 宮 隆 弘

私がお手伝いをしている日米欧総合安全保障議員協議会の仕事で、昨年11月イスタンブールへ行って来た。我が協議会のカウンターパートである NATOPA の年次総会を傍聴して議員会員に報告する為である。



イスタンブール総会

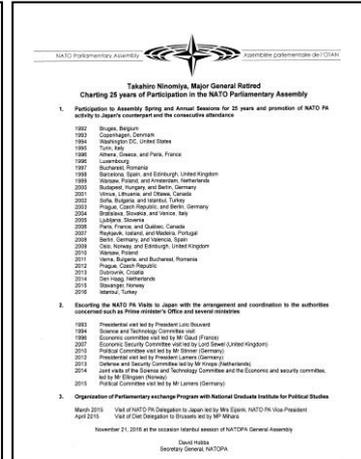


総会で審議に聞入る二宮

この時、ホブス NATOPA 事務総長は、私の 25 年にわたる NATOPA に対する協力・支援に対して、金のメダルを付して感謝状を授与された。1992年の就任から2016年までの四分の一世紀に及ぶ長期間における、次の実績に対してである。

- ① NATO PA 総会への参加とその成果の伝達、
- ② NATO PA の訪日に対する総理官邸訪問、関係大臣への表敬を含む調整・支援、関係省庁、研究機関、防衛産業の訪問、迎賓艇による歓迎、自衛隊基地及び京都御所等の文化施設見学及び
- ③ 政策研究大学院大学との共同による議員交流計画の企画と実施

自己宣伝の様で小恥ずかしいが、こんなことをする奴もいたとご笑覧頂きたく寄稿した。



金のメダルと感謝状を受領する二宮

二宮に対する感謝状及び25年間の参加記録

感謝状（仮訳）

二宮隆弘 殿 退役空将補

日米欧総合安全保障議員協議会事務局次長

親愛なる二宮さん

貴方が四分の一世紀にわたり、NATO加盟国国会議員会議（NATO PA）と日米欧総合安全保障議員協議会（DMCCS）間の協力に尽力されたことに対し、私はその業績に深く感謝の意を表明致します。

貴方は1992年以来、多くの春季総会とすべての年次総会にご出席されました。そして日本のための素晴らしい代表を務められました。

また、1993年以来、貴方はNATO PAの各委員会、下部委員会や高級幹部による数多くの日本訪問の立案・管理をされました。これらの訪問は、NATO PAと日本の国会との協力を大いに強化させるものでした。

更に、貴方は、NATO PA幹部メンバーと政策研究大学院大学を包含した議員交流計画を開設し、立案・管理されました。

貴方が組織し、また、管理された会同のリストは実に感銘を与えるものですが、それ

以上に貴方が長期にわたり築かれた NATO PA との価値ある交流による友情の絆は更に感動的なものであります。

委員会の事務局長として、次いで副事務総長として、そして現在は事務総長として、私は貴方と共に働いた多くの計画に際して貴方からの助言と援助から多くの便宜を受けました。貴方とともに働く機会を持った私の同僚すべての人を代表して心からの感謝の意を表させていただきます。

イスタンブールで開催された NATO PA 第 6 2 回年次総会に際し感謝を表明し幸運を祈念致します。

敬具

署名

デービット ホブス

NATO 加盟国国会議員会議事務総長

NATOPA における 25 年間の参加記録（仮訳）

1. NATOPA の春季総会及び年次総会への 25 年参加記録と

NATOPA の活動の

| | | | |
|------|-----------------------------|------|----------------|
| 1992 | ベルギー ブルージュ | 1993 | デンマーク コーペンハーゲン |
| 1994 | 米国 ワシントン D.C. | 1995 | イタリア トリノ |
| 1996 | ルクセンブルグ | 1997 | ルーマニア ブカレスト |
| 1998 | スペイン バルセロナ 及び 英国エディンバラ | | |
| 1999 | ポーランド ワルシャワ 及び オランダ アムステルダム | | |
| 2000 | ハンガリー ブダペスト 及び ドイツ ベルリン | | |
| 2001 | リトアニア ビリニュス 及び カナダ オッタワ | | |
| 2002 | ブルガリア ソフィア 及び トルコ イスタンブール | | |
| 2003 | チェコ プラハ 及び 米国 オーランド | | |
| 2004 | スロヴァキア ブラティスラバ 及び イタリア ベニス | | |
| 2005 | スロベニア リュブリャナ | | |
| 2006 | フランス パリ 及び カナダ ケベック | | |

2007 アイスランド レイキャビク 及び ポルトガル マデイラ
 2008 ドイツ ベルリン 及び スペイン バルセロナ
 2009 ノルウェー オスロ 及び 英国 エディンバラ
 2010 ポーランド ワルシャワ
 2011 ブルガリア バルナ 及び ルーマニア ブカレスト
 2012 チェコ プラハ
 2013 クロアチア ドブロブニク
 2014 オランダ デンハーグ
 2015 ノルウェー スタバンゲル
 2016 トルコ イスタンブール

2. NATO PA 訪日時の総理官邸等訪問の準備・調整と同行支援

1993 ブバード会長一行の会長訪日 1994 科学技術委員会訪日
 1996 ガウド氏（仏）代表の経済委員会の訪日
 2007 シューエル卿（英）代表の経済安全保障委員会の訪日
 2010 ステイナー氏（独）代表の政治委員会訪日
 2012 ラマーズ会長一行の会長訪日 2013 クノップ氏（蘭）代表の防衛安全保障
 委員会訪日
 2014 エリングセン氏（ノルウェー）代表の科学技術委員会・経済安全保障委員
 会訪日
 2015 ラマーズ氏(独)代表の政治委員会

3. 政策研究大学院大学との共同議員交流計画

2015.3 エイジンク副会長代表の NATOPA 代表団訪日
 2015.5 三原議員代表の国会代表団訪欧

2016.11.21 イスタンブールにおける NATOPA 年次総会において
 デービット ホブス NATOPA 事務総長

民主主義への疑問（多数決は正しいのか）

小 西 忠

「民主主義」は、全ての人々が平等である事を基礎とするが、物事を決めるときに全ての人の意見が一致するとは限らない。だから多数決を使って、多数派の意見を全員の意思とみなす。ところが昨今、どうもこのみなすが忘れられ、単純な数の多さが絶対視され勝ちだ。改めて考えたい、多数決は民主主義にとって重要なルールだが、絶対のルールではないということ。（朝日新聞 2016.10.30 の論説から抜粋）

最近の世界情勢を見るに、私の考えとは違った方向に向かっているように見える。私の考えが間違っているのかもしれないが？

最近ではアメリカでのトランプ氏の勝利、イギリスの EU 離脱、ブルガリアの難民受け入れ拒否、フィリピンのドゥテル大統領の麻薬取り締り方法等は多数決の原理に従ったものだが、少数意見を無視している。いいのだろうか、疑問が残る。賛成と反対が拮抗（49%対 51%）している場合に 51%の意見の勝利としていいのか？ 49%の意見は全く無視されても仕方がないのか、疑問に思う。

（参考、トランプ氏の獲得選挙人数 289 人、投票者数 5、913 万人

クリントン氏の獲得選挙人数 218 人、投票者数 5、929 万人 11 月.10 日時点）

民主主義がすべての国民に人権を認め、国民に主権があるとしたことは正しいと思う、イギリスはマグナカルタにより王権を制限し、フランスは革命により王制を廃止し共和制にしたのも正しかったと思う。古い中国で賢人政治がもてはやされ、また一時共産主義がもてはやされたのも思想は悪くなかったが、実効性がなかったため消えていった。

（共産主義の基本は“人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る”というものである。）また、ヒトラーは正当に選挙され選ばれて総統になったが、ホロコーストをつくってしまった。

主義主張が正しくてもその実行が不可能又は実行困難であればその主義は空理空論となる。民主主義もその主義の本来の目的のためにその原則の実行が困難な時はそれを克服する方法を探すべきである。多数決は原則であっても目的にはなり得ない。

多数決の原理はみなしであって、正しい結論とは必ずしも言えない。これを正しいとすれば選挙権を 18 歳以上に制限していること、選挙の結果がその州のすべての選挙人を総取りすることは民主主義の根本である全ての人間を平等に扱うということと相反している。（小選挙区制も同じ）

さらに、多数決を堅持すれば、人口の今後の変化を考えねばならない。ウィキペディアによれば、世界の総人口は現在の 73 億から 2050 年のそれは 100 億へ、

中国は13億から20億に、インドは12億から25億へ、アメリカは2.5億から3.5億へ、日本は1.3億から1.0億へ変化するという。一般に増加率は白人より有色人種のほうが大きく、高学歴より低学歴のほうが大きい、アメリカの大統領は今後黒人が常態となり、世界の中心はアジア、インドに移ってゆこう。

民主主義が生き残るためには多数決の原則に修正を加えるか、新しい主義を導き出す必要があるかもしれない。

以上、独断と偏見で私見を述べ立ててみました。2050年はあの世から眺めている事でしょう。

埋め草

思い出の写真2

会報編集のために、古い写真箱をかき回していたら珍しい写真が色々出ていました。卒業アルバムにいろいろな写真が載っていますが、同じ様な内容でないものを選びました



左の写真は1年生の時の運動会の仮装行列です。後方の行列は31小隊の海賊です。私が写真を撮ったのですが、題名は忘れしました。この運動会の記憶はほとんどありませんが、卒業アルバムを見ると、横須賀市立工業高等学校の運動場で第1回運動会が開かれたと書いてあります。

右の写真は2年生の時の陸上要員が海上訓練で和船を漕いだ時の写真です。写っているのは2年生の時の23小隊の仲間です。前列左から春山・原・末次・遠藤・守屋(義)・小林(泰)・鈴木(喜)、後列左から渡辺・助教・富田・伊藤(茂)の諸兄です。私のカメラで写したので、私が写っていないのが残念です。



この訓練のおかげで、この後の休暇で郷里に帰った時、琵琶湖で和船を漕ぎ、高校時代のクラスメートが、驚いていたのを思い出します。

カッターや警備艇等の乗船訓練の写真はよく見かけますが、和船の訓練の写真は珍しいので掲載しました。

(山本晃三)

原爆等の思い出

高山雅司

昨年は米国大統領が広島原爆慰霊碑で、また日本の首相がアリゾナ記念館でそれぞれ日米の戦没者への慰霊の献花を行った。私はいずれも何度か訪れているが今回のことは日米関係にとって画期的に重要なことであった。



(原爆慰霊碑への日米首脳への献花)



(アリゾナ記念館での日米首脳への献花)

我がクラスの世代は小学生の5年間で、その戦時の体験は忘れることはできない。開戦劈頭、ハワイの戦果に欣喜したがその後、日米両軍は激戦を繰り返し米の圧倒的な力に劣勢となり、ご承知の通り最後は原爆の洗礼を受け日本の敗戦となった。



(爆発炎上する戦艦アリゾナ)



(攻撃を受ける真珠湾の米戦艦群)

私は広島原爆を爆心から西へ10キロメートル離れた廿日市国民学校の校庭から見た。強烈な閃光と30秒後の青空を波状に飛んできた衝撃波のすさまじい轟音は忘れることができない。まさにピカドンであった。

広島原爆の犠牲者14万人余のその中に米軍兵士の捕虜12名が含まれていた。このことを米国政府は長い間認めてこなかったが昨年オバマ大統領は言及した。私はその死

亡した捕虜が乗っていた B-24 重爆撃機が撃墜されるのを見ていた。



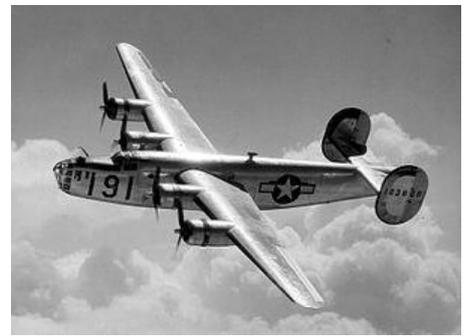
(広島の前爆)



(廃墟となった広島市中心部)



(原爆投下のエノラゲイ B29)



(B24 リベレーター)

低空で飛ぶ B24 の編隊の最後の 1 機に高射砲弾が命中し、右に傾き墜落した。B29 は高く飛ぶのに B24 は低空であったので子供心にも不可解であった。数年前にその時に撃墜された米軍機長が撃墜された経緯等の本(参考資料①として紹介)を書いたのでそれを読んだ。私は 70 年間疑問に思っていたことが氷解した。広島に収監された捕虜の中で彼は東京に移送され尋問を受けたために原爆から助かった。彼の B24 は 20 年 7 月 28 日に 33 機で沖縄の基地から豊後水道を北上しハルゼーの海軍航空部隊に呼応し、呉軍港の戦艦榛名を爆撃した。ハルゼー艦隊は 20 年 7 月の末に真珠湾の報復で呉軍港に油がなく動けなくなった日本海軍の残った戦艦、航空母艦、巡洋艦等を攻撃、撃破、または沈座させた。艦艇攻撃に空母の艦載機だけでなく沖縄から米陸軍の B24 重爆撃機がそれに参加したのは想像外の驚きであった。そして戦艦榛名を爆撃後、広島上空を経由して豊後水道に向かう途中で 2 機が撃墜されている。私が見たのはその 1 機で、すぐそばに落ちたと思ったが墜落現場は隣の隣村であった。もう 1 機は山口県の柳井の北部に墜落している。

兄が江田島の海軍兵学校の生徒だったので、昭和 20 年 8 月 5 日の日曜日、母がもう会えないかもしれないと私を連れて広島宇品から汽船に乗り江田島の兵学校へ面会に行った。汽船が江田島の小用付近になると目の前に大きな戦艦が現れびっくりして目を見張った。樹木で艀装し銃砲はすべて最大仰角で乗員は忙しく立ち回っていた。



(戦艦榛名の勇姿)



(沈座した榛名 (終戦後の写真))

戦艦は相当の被害を受け後部は着底し潮に覆われていた。前記の B24 などが 8 日前に攻撃し大破沈座させた戦艦榛名であった。これが 8 日前に見た撃墜された米軍の爆撃機が関係していたとはその時は勿論判らなかった。戦艦榛名はハワイ海戦からレイテ沖海戦まで参加した日本海軍で最も活躍した高速戦艦であった。

汽船が小用の港に着くと港内には数隻の汽船が完全に破壊され周辺の家のガラスはなかった。バスは動いてないので海軍兵学校(現海上自衛隊第1術科学校)まで歩いた。日曜日であったが、生徒の外出はなく、兄との面会もできず、すごすごと帰路につき、越えた峠から戦艦榛名が下方によく見えた。すごい眺めだったことをよく覚えている。帰りはまた汽船で宇品につき次の日に灰燼と化する広島を中心を往復し、電車で廿日市に帰宅した。当日は快晴で平穏な、しかし暑い一日であった。

翌 8 月 6 日は月曜日で前日同様の晴天で 5 年生も勤労奉仕に行くとのことで国民学校に集合し、校庭に整列している 0815 頃に原爆を受けた。ピカドンで同級生は皆とっさに手近かの学校の縁の下に入ったが先生の指示で防空壕に入りなおした。学校は大した被害はなかった。夕刻には広島から逃れてきた被爆者の収容所となり一杯となった。そのため、数か月学校は休みであった。母も被爆者の看護にでかけていた。収容した被爆者の大半は亡くなり、学校の庭に小屋が作られその中に箱が山積にされ中をのぞくと死体で驚いて飛び出したことを思い出す。焼き場の煙が絶えなかった。悲惨な思い出であった。

原爆で犠牲になった米兵の銅板の慰霊碑は被爆者の一人森重昭さん（昨年オバマ大統領と慰霊碑の前で抱擁した一人・参考資料の著者と訳者）により憲兵隊司令部跡（原爆中心から約 400 メートルで米軍捕虜はこの留置場に収容されていた。）に建立されている。

（参考資料②参照）



（被曝米兵の慰霊碑）

ハワイ攻撃の時カネオエ飛行場に突入戦死した飯田房太大尉（中佐へ特進）の慰霊碑は当時米兵が同基地に建立し、昨年 12 月、安倍総理も献花した。

日米は相手を悼む共通の文化を持っている。中国・朝鮮半島はそうではないようである。この激烈だった戦争の戦死者、犠牲者を悼み同盟国とはいえ過去の忘れがたい恩讐は存在する。

しかし、日米にはそれらを乗り越えて共有できるものがこの 70 年間に培われ強固な信頼となって存在する。今回の日米首脳の間はそれを示し、



（被曝米兵の慰霊碑）



（安倍総理の献花）

これにより両国の和解は一層深まったと考えられる。日米同盟が確固たるものになり日米が永遠に 2 度と闘うことがないことを確信し両国がトランプ政権になっても今後日米が更に世界の平和と安全に力を合わせて行くことを期待する。

参考資料：①「爆撃機ロンサムレディー号」トーマスカートライト森重昭訳 NHK 出版 2004 年

②「原爆で死んだ米兵秘史」森重昭 光人社 2008 年

樺太慰霊巡拝

山本 晃三

昨年の9月17日から21日までの5日間に厚生労働省主催の樺太慰霊巡拝の事業が行われましたので、参加いたしました。

私の父は北千島で戦死していますので、11年前に行われた北千島の慰霊巡拝に参加しています。その後も同じように北千島で行われる慰霊巡拝が実施されるなら、それに参加しようと待っていたのですがなかなか実施されません。この樺太慰霊巡拝の実施が公告された時、厚生労働省に千島の慰霊巡拝について問い合わせたところ、ここ当分の間はその予定はないとのことでした。私も、もう歳ですので、北千島に行けないのなら、この機会に樺太の元国境の近くにある、樺太・千島戦没者慰霊碑に参拝したいと思い、今回の樺太慰霊巡拝に参加した次第です。

樺太慰霊巡拝の経過は次の通りです。（文末の樺太慰霊巡拝概見図参照）

9月17日の夕刻に千歳空港に集合し、結団式を行いました。参加者は遺族8名（戦没者の弟1、妹1、子供5、子供の配偶者1）厚生労働省の職員2名、通訳1名の計11名でした。17日の夜、千歳を出発し、深夜にユジノサハリンスク（豊原）に到着し、同地のホテルに宿泊しました。

翌18日は日本語の堪能な添乗員が同乗の貸切バスでユジノサハリンスクにある旧豊原病院に行きました。ここでは参加遺族のお父さんが戦病死されていますので、この病院の前で簡単に慰霊の手を合わせたのち、日本人墓地に赴き、ここでこの地区の慰霊祭を行いました。先の豊原病院で亡くなった戦没者は、こちらに葬られているようだとのことでした。かつての日本人の墓地はすべて破却され、この日本人墓地がそれを代表する意味で戦後に建てられたようです。周りはロシア人の墓地ですが、かつては日本人の墓が沢山あったようで、日本人の墓石が道路の縁石になっているものもありました。



日本人墓地での慰霊祭



栄浜での慰霊祭

その後一気に北上し、オホーツク海を望むスタロドゥブスコエ（栄浜）で千島方面の戦没者の慰霊祭を行いました。千島方面の戦没者遺族の参加者は私以外にも一組あり、私と共に、千島をはるかに望んで戦没者の慰霊を行ないました。

父の部隊の戦死者は京都・岡山・島根の出身者が多かったので慰霊祭のためにこれらの地方のお酒と菓子を持って行っていましたので、これらを

捧げ、慰霊祭終了後、オホーツク海に流しました。

慰霊祭後は更に北上を続け、ポロナISK（敷香）のホテルで泊まりました。

19日はスミルヌイフ（気屯）の旧日本軍兵舎跡を見た後、日ソ両軍の激戦があったポペジノ（古屯）の戦場跡付近でこの地区での戦死者の慰霊祭を行いました。



旧日本軍兵舎跡



古屯での慰霊祭

その後もう少し北上し、旧日露国境の国境の標石の跡地を見学しました。標石は撤去されていました。この標石はユジノサハリンスクにあるサハリン州立の博物館に展示されています。



旧日露国境の標石跡

その後少し南下し、スミルヌイフ（気屯）にある樺太・千島戦没者慰霊碑の前にて合同追悼式を行ないました。これには参加遺族の居住県の各知事からの供花も供えられ、ユジノサハリンスクの総領事館の代表者も参列して盛大に行われました。その後、再び南下して、前日宿泊したポロナイスク（敷香）のホテルで泊まりました。

20日は、一気に元来た道を南下し、ユジノサハリンスクに戻り、サハリン州

立博物館見学と日本の総領事館訪問をして、最初の日に泊まったユジノサハリンスクのホテルに戻り、翌21日の昼の航空機で千歳に戻りました。

以上が、樺太慰霊巡拝の概要ですが、バスの中から見た感じでは、道路は南樺太から北樺太へ向かう幹線だけは基礎もしっかりした立派な舗装道路でしたが、幹線を外れると舗装は無く、砂利道でした。インフラ整備の経済力がないのではないかと思います。石油・ガスの資源面の産業は好調とのことですが、かつての王子製紙の大きな製紙工場



旧王子製紙の廃墟

の何か所かが廃墟の状態に残っています。道路を走っていると、元コルホーズとかソホーズの跡だと云う大きな農地の跡があるのですが、何も作られていません。添乗員に聞いても、ずっと空地になっているとっていました。一か所だけ水耕農場のような温室風の建物を見ただけです。経済力があれば、このような施設を沢山作っているはずです。以前行った占守島でも終戦後、何等の整備もしない様で、港の突堤に大きな穴が開いていました。今、ロシアはインフラ整備のお金が欲しくてたまらないところなのでしょう。また、こうした樺太の厳しい自然環境を考えると、樺太だけでなく地球の最北に位置するロシアに住む人々は少しでも環境の良い南の方に住みたいという欲望を持ち、それを抑えることは難しいのではないかと思います。クリミアの問題も戦略的な問題もあるでしょうが、基本的には同じだと思います。従って北方領土の返還交渉もロシア国民のこうした考えを抑えることは難しい問題であり、簡単には行かないと思います。



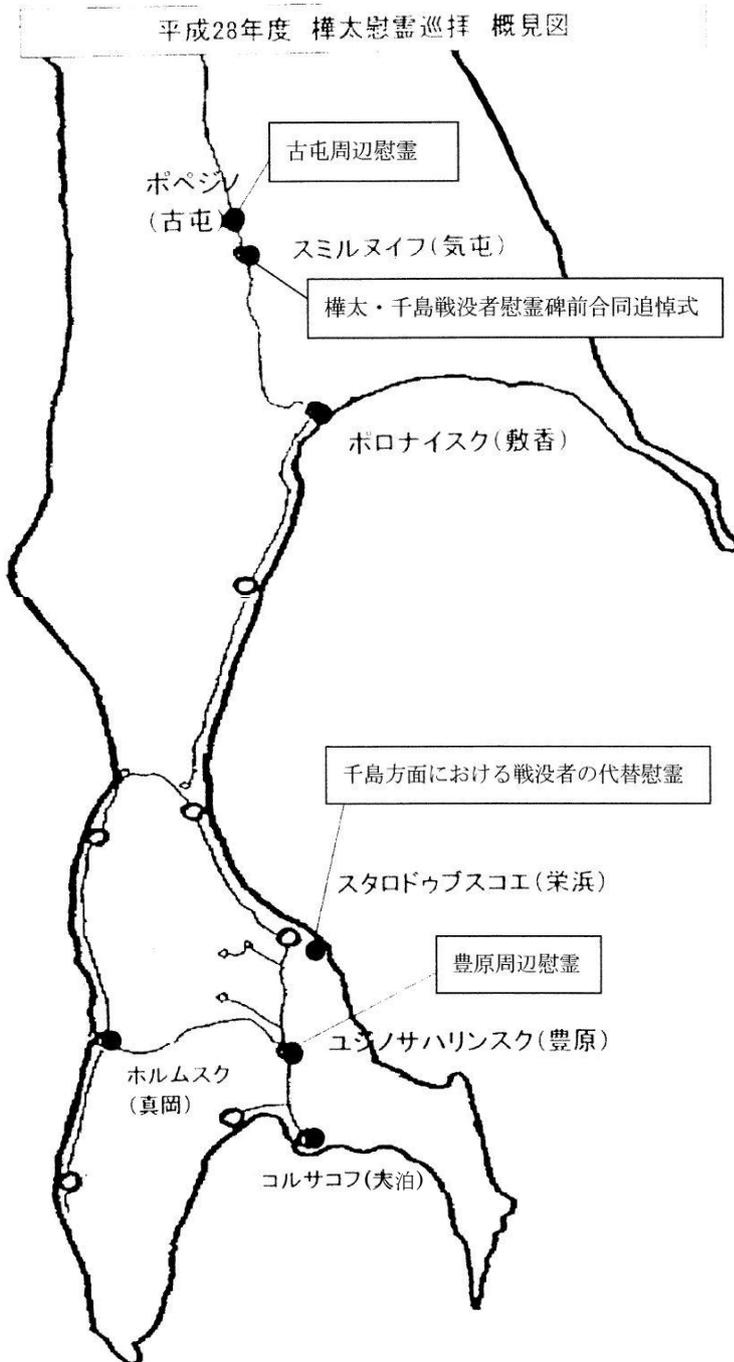
合同追悼式

最後に、樺太での戦闘は、昭和20年8月10日以降の、この古屯地区での戦闘が最も大きなものですが、その他に真岡（ホルムスク）では終戦後5日もたった昭和20年8月20日にソ連軍が艦砲射撃の後、上陸を開始しました。これに対応して、停戦交渉を行おうとして日本軍が派遣した軍使が二度にわたって射殺され、さらに避難する一般住民に攻撃を加えるという暴挙を行っています。このようなことは多くの日本国民は知りません。今、法による国際秩序が叫ばれていますが、このような状況も過去にはあった

のだということを教え、国際法規による秩序の維持が如何に難しいかを日本国民に知らしめる必要があるのではないのでしょうか。

昨年の会報の埋め草で書きましたが、憲法前文に書かれている、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われわれの安全と生存を保持しよう」という文言はこの一年間の中国・北朝鮮・韓国の行動をみているとまさに空しいものを感じられます。ロシアを含め、我が国に最も近いこれらの国々が憲法前文に想定した行動の真逆の行動を取っており、いかに今の憲法が空しいものかということをもっと全日本国民に知らしめる必要があると思います。

尚、樺太戦史の概要と現在の樺太の状況については、もう少し詳しい内容の厚生労働省の資料が、一期生会ホームページの私の樺太慰霊巡拝報告内に掲載してありますのでご覧ください



生老病死

中尾時久

昔の人は「不老不死」の薬を求めて叶わぬ夢を追っていたが、今や日本人の殆ど全てが不老不死の薬を手に入れたかのような長寿を達成した。女性の平均寿命も世界一である。

しかし、長寿国の弊害も指摘されるようになってきた。18年後の2035には高齢化率が33.4%に達し、人口の3分の1が高齢者という社会が出現する。そして、支える人が少なくて支えられる人が激増する結果、財政的にも人口構成的にも悲劇的な社会が到来するという。その具体的な様相の一例に就いて、曾野綾子氏が産経新聞の「小さな親切、大きなお世話」(H25.8.25)で書いていることを紹介しよう。

「老人ホームの人々は、食事は与えられても、入浴や排泄の面倒をみる人がいなくなるだろう。町には棄民に近い孤独な高齢者が溢れ、道端に横たわり、死なないだけで生きているとはいえない状況で、彷徨(さまよ)い歩くようになるだろう。

若者たちは老人の存在自体を悪と考えるか、或いは自分達の世代の発展を阻害するものとして敵視する。その結果個人的に高齢者を殺害するか、あるいは集団で老人ホームを襲撃したり、火を放って焼いたりするようになるかも知れない。

一方で、老人は若い世代からますます自分の生が脅かされていると感じ、若い世代を憎み、自分達がただ生き延びることだけを考えて、利己的な自衛に走るようになる。そこには一定の時期が来れば人は死ぬものだという人間らしい覚悟も哲学も、存在のかけを潜める」

自分本位の中国・韓国の国民はいざ知らず、心根の優しい日本人はここまで過激化しないと思うが、国中が老人で溢れかえるのは確実だろう。

この前、娘たちに「死期」に就いて冷やかされた。娘たちが言うには「お父さんは若い頃に、『命長ければ恥多し。長くとも40(よそじ)に足らぬほどにて死なんこそ目安かるべきだ。だから40で死ぬよ』と言っていたよ」と。これは、兼好法師が「徒然草」で述べていることである。

続けて娘たちが言う。「お父さんは40代になってからは『人間50年、下天のうちを較ぶれば夢、幻の如くなり、ひとたび生を得て、滅せぬもののあるべきかだ。だから50まで生きれば十分だ』とも言っていたね」と。これは、織田信長が謡った「敦盛」の一節である。

更に、娘たちが追い討ちをかけてくる。「お父さんは50代になって『人生の区切りは還暦であり、60歳でまた人生2度目のサイクルに入る。60歳まで生きれば人生終

わりでよい』とも言っていたよね」と。

それなのに、♪ああそれなのに、それなのに♪ 古稀を遥かに過ぎて、傘寿さえ越えてしまった。自衛官という仕事柄から、いつ戦場の露と消え去るかも知れないので、娘達にそれとなく父親の早逝の可能性を示した積りだった。まさか、80歳の壁を越えられるとは、在隊間は考えもしなかった。

幸いなことに、防大1期生は平成27年に全員が80歳代の老の坂道に入った。

80歳代になって思うことは「そんなに長生きしても仕方がない。ソロソロ人生を終わる潮時かも知れない」ということである。

今や生産活動は何もしてないし、社会への貢献も現役時代に比べたら微々たるものだ。反面、年金を頂き、若い時の何倍も病院にお世話になって、現役世代に負担を掛けている。65歳で役員定年になってから約17年間も悠々自適な生活を楽しみ、現役時代の疲労もストレスも完全に癒されている。もう、行きたい外国も観光地も無く、食べたいご馳走も無くなっている。身を焦がすような恋とも無縁である。それどころか、瑞寶中綬章の叙勲や天皇・皇后両陛下から園遊会にお招き賜るなど、輝かしい栄光の時があったとはいえ、今や無用の長物と化し、この世に存在すること自体が社会のお荷物となってきたようだ。

両親は既にこの世になく、法事とお墓参りが残された親孝行である。また、二人の娘も幸せな家庭を築いていて、とっくの昔に養育の義務から解放されている。家内についても私が逝った後で、路頭に迷わないで暮らせるように生存環境を整えてある。家族に必要不可欠とされないのは寂しい事である。

また、最近の中国・韓国の自己中心の歴史認識に基づく不当な日本叩きの言動に、何等有効な反撃も出来ない日本の惨状をこれ以上見たくもない。併せて、国賊とも売国奴といえる朝日新聞等の反日的マスコミの言動にこれ以上接するののもうご免だ。

現在は痛いところも病んだところも無く、若い時ほどで無いにしても運動も出来るが、将来的には次第に老化が進んで不自由な生活を強いられて来るだろう。更に、年下の近親者と死別することも多くなり、人生の悲哀を感じていくことだろう。これ等の思いを総合して80歳代が人生の潮時かなあと思えてくる。

しかし、家内が「貴方の今の良い生活習慣と、97歳まで生きたお母さんのDNAからして、100歳まで生きられるわよ」と冷やかすので、老醜を晒すのはご免だなあと暗澹たる気持ちになる。

また、長生きで最も危惧することは「介護」のことである。夫婦で「絶対に娘達に介護されないように、最後まで自立して生きて行こう」と話し合っている。永い老々介護の果ての痛ましい心中・殺人等の報道を耳にする度に、「お互いに老々介護をしなくても済むように、ボケや病気・怪我に気を付けよう」と夫婦で決意を固くしている。しか

し、決意で解決できることでは無いので、死よりも要介護が心配になる。死の直前まで、人間としての尊厳を維持したいものだ。

読売新聞夕刊（H28.9.30）に小説家・黒井千次氏が80歳代の心境を綴っている。要旨は次の通りだ。

「なんとか70代を過ごし、80代が前に見えてくると、体力は衰えて、息の乱れや心臓の働きが気になり、80代への坂が険しいものに見えてくる。それだからであろうか、80の峠に立つと、これでなんとか老人の域に達したか、と一息つく感がある。そこに着くまでが一苦勞で息をつめていたためもあり、80代に達すると、ようやくこれで<老い>の入口をくぐったか、と我が身を振り返る。そして、ふと気がつくのだ。80歳、80代とそれを一つの目処にしてここまで来たが、次の努力目標はどうなるのだろうか、と。

80という大きな区切りを過ぎた以上、更に先を重ねる年令を区切って、そこまで生きる目標を定める必要はないのではあるまいか——。ところが、どうもそうではないらしい、と最近になって気がついた。80代に入り、1年2年と経つうちに、自分の内に85歳という年令が、次の区切りとして生まれていることを発見した。

70代と80代との間には深い谷間があり、そこを越えるのは一仕事だ、との感触があった。しかし、80代に入ってしまった後は、遙か遠くに90代の標識が霞んで見えているだけだろう、と思っていた筈なのに、いつか次の到達目標が生まれているのだ。とりあえずは85歳というあたりに——。

一方には、それにしても永く生きて来たのだな、と足を止めて我が身を振り返ってみることもないわけではない。戦中・戦後の子供の頃のことなど思い出せば、確かにあれは遙かに遠い遠い昔であったな、と改めて感じざるを得ない」

長々と引用したが、80老翁の心境として肯けることが多いからだ。今は90代の壁が険しく感じられるが、100歳に達した日本人が6万人弱も存在する現実からしたら、いくら断崖絶壁であっても、我が同期生の幾人かはその壁を乗り越えて、100歳まで生きる可能性もあるのではないだろうか。

さて、「生老病死」が人生の恒だから、死はいずれ万人に公平にやってくる。どういう死に方をするかは夫々の運命だろうが、望ましい死に方と避けたい死に方はあると思う。

事故死は避けたい死に方の筆頭だろう。事故死の典型的なものが航空機事故、自動車事故、列車事故等の交通事故であり、いずれも悲惨である。

火災による焼死も周辺に迷惑をかけるし、その他諸々の事故死は万人が欲しない死に方であろう。次いで、自然災害死も地震、津波、台風、洪水等によるもので、何れも誰も望まない死に方である。

また、自殺死は死期を自ら選べるが、なんとも痛ましい。

矢張り、受け入れ易いのは病死であろうか。「生老病死」という言葉も老いと死の間に「病」を置いている。病も痛みが激しいもの、長期療養を要するもの、医療費が掛かり過ぎるものは死の前提の病としては望ましくない。

病死の対極にあるのが「ピンピンコロリ」だろう。これは、ズット元気だった人が、或る日突然に寿命が来て眠るが如く亡くなることを指すようだ。事故死や自然災害死が強制的な突然死であるのに対して、天寿による突然死であり、望ましい死に方の筆頭に挙げられている。これに形態が似ているのが、手遅れの脳、心臓、血管による突然死だ。しかし、突然死は遺族に心の準備を与えないし、最近のようにカードでもPCでも銀行口座でもパスワードが必要な社会では、遺族に困惑と損害を与えそうだ。

ある本によれば、末期癌で死ぬのが最上だという。今は痛みを和らげてくれる薬があるし、死ぬまで意識ははっきりしているし、何よりも死ぬ前に身辺整理する適度の時間を取れるというのが有難いそうだ。

長生きは程々でよく、ヨボヨボになって老いサラバエない適当な時期に死んでもよいと思えるが、ラジオ深夜便で聞いた高齢者の次の淡々とした境地も味わいあるものを感じた。即ち「周りに大事な人が何人か居て、少しでも美味しいものが食べられて、しょうもない事に笑える毎日だったら、それで良い」と。存在感とか生甲斐とか理屈をこねず、日々のささやかな幸せに満足して、天寿を全うする心境を言ったのであろう。

防大入学以来、いかにより良く生きるかと切磋琢磨しながら「生きざま」を追求して八十路を迎えたが、防大1期生の各人の人生には、どんな幕引きが待っているのだろうか。

(注) 本稿は5年前に「老いの戯言」と題して1期生会ネット網に発信したものを、大幅に加筆修正した。

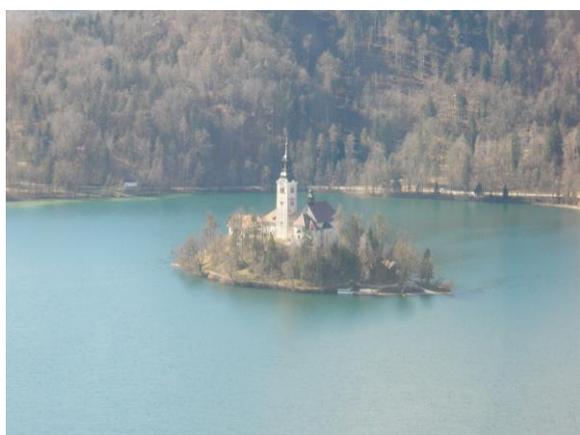
バルカン半島紀行

宮本直躬

平成 28 年に、畏友山本晃三君に誘われてバルカン半島の北と南を 2 回にわたり旅行する機会に恵まれた。

第 1 回目は、2 月下旬バルカン半島西部アドリア海沿いのスロベニア、クロアチア、そしてやや内陸に入ったボスニア・ヘルツェゴビナの 3 ヶ国で、6 泊 8 日の行程であった。

羽田からミュンヘン経由、オーストリーの南部グラーツから陸路スロベニアに入り、ブレド湖に浮かぶ世界遺産聖マリア教会(下写真)等を見学したのを手始めに、首都リュ



ブリャーナを経てクロアチアに入った。その後アドリア海沿いに南下シベリク、スプリットの世界遺産群を観て、アドリア海の真珠と謳われるドウブロヴニクの城壁都市(下写真)



を歩いたのち、ボスニア・ヘルツェゴミナの石橋(下写真)で有名なモスタルを見学。



再びクロアチアに入り、ブリトヴィツェ湖群国立公園から首都ザグレブを経て、往路と同じ経路で羽田に帰着した。

第 2 回目は、11 月下旬、羽田発カタールのドーハ経由でアテネ着。ギリシャ北部の世界遺産メテオラの巨岩上にある修道院群を見学し、次いでギリシャ神話アポロンの神託で

知られるデルフィ遺跡を、更にアテネに入り世界的に有名なパルテノン神殿を始め遺跡群や歴史博物館等を巡り、往路と同じ経路で、3 泊 6 日の慌ただしい日程であった。

ちなみに、シーズンオフを利用した旅行だったためか、第 1 回目が 11 万 5 千円、第

2回目が8万2千円と極めて廉価であったが、ホテルも食事も一般のツアーに比し遜色は無かった。

バルカン半島は、ヨーロッパと中東更にはアジアとの交通上の要衝に当たり、古来民族と宗教が入り乱れ、これに伴う紛争が絶えず、その複雑な歴史はなかなか理解し難い。

旅行前、柴宣弘著「図説、バルカンの歴史」を読んだが殆ど頭に残らなかった。

ここでは、実際に現地を歩いたスロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴミナの3ヶ国のうち、第2次世界大戦後のユーゴ内戦について述べたい。

1945年、スロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴミナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニアの6共和国から成るユーゴスラビアは、チトー大統領の下、独自の共産主義国家を形成していたが、1980年チトーの死去、1989年のベルリンの壁崩壊に始まるソ連邦の解体過程において、各国の独立機運が高まり、先ず1991年スロベニア、クロアチア、マケドニアが独立を宣言し、1992年ユーゴスラビアは解体した。

この間、クロアチア内戦、ボスニア内戦、コソヴォ紛争が生起したが、特にボスニア内戦はボスニア・ヘルツェゴミナの独立を巡り、独立指向のムスリム、クロアチア人勢力とセルビア人勢力の抗争で、20万人の死者と250万人の避難民を出す大惨事となった。

隣同士が敵味方に分かれた話も伝わっている。ギリシャ正教系のセルビア人によるイスラム教徒のムスリム人に対する民族浄化作戦(イスラム教徒の男子全員の虐殺と女性に対する強姦と強制した妊娠出産)とNATO軍によるベオグラード空爆は新聞、テレビ等によって記憶も鮮明である。今回、紛争の現場となったヘルツェゴミナのモスタルを訪れたが、激戦の跡も生々しい無数の弾痕の残る家々(下写真)を方々に見ることができた。ネレトヴァ川に架かる石橋は修復されていたが、キリスト教の教会とイスラム教のモスクが混在し、将に民族と宗教の交差した街であった。

アドリア海の真珠ドウブロヴニクも、91年から92年にかけて7か月間、ユーゴスラビア人民軍によって攻撃され旧市街が大きく破壊されたが、今も爆弾の投下された跡が残っている。

通過した街々には共産主義時代の荒廃した工場や無機質の画一化したアパート群が散見された。

添乗員を通じての現地人の話では、昔は貧しくても平等であったが、現在は自由で物も豊かになりながら物価が高くて賃金が追い付



かないこと、格差が生じている等いずれが良いとも言えないとのことであった。しかし本心では昔に帰って欲しくない印象を受けた。

スロベニアとクロアチアはEUに加盟し、街に華やぎを感じられ先進国への道を着実に歩いているように見受けた。

ギリシャは第2次大戦後NATOに加盟し、観光立国の道を歩んできたが、最近の財政破綻による影響か全体に活気が感じられず、アテネ市内の雑然とした街並み、特にビルの壁に処々見られる大きな落書きは観光者にとっては猥雑そのものである。

最も印象に残ったのは、14世紀から16世紀にかけて建てられたメテオラの巨岩上の修道院群で、外敵に対してよりも俗世を離れて一步でも神に近づく宗教上の理由と思われるが、如何にして造られたのか土木工学専攻の私にとってはそちらに興味があった。その中には、「007ジェームス・ボンド」の映画のロケ地となった修道院(下写真)もあり、将に四面断崖絶壁の孤立した岩山にあり天下の奇観である。

この旅で、60歳半ばと推定する女性と知り合ったが、彼女は大学へ進学できなかったことを悔やみ、60歳で会社を辞めたのち、慶応大学史学科の通信教育を受け終了したばかりだそうで、ギリシャ神話と日本神話の類似性を現地について見聞したいとツアーに参加したとのこと。歳をとっても知的好奇心を絶やさない彼女の人生態度に感服するとともに、色々な人と出会うのも旅の楽しみである。



山本君との海外旅行は、一昨年のベトナムを含めて3回となったが、いずれの旅行でも



も老年男子が二人仲良く参加していることに参加者から奇異な関心を抱かれた。防大の同期生であると説明すると、皆一様に羨ましいですねと言われたが、一般の社会ではなかなか得られない絆を我々一期生は共有している喜びを感じたものである。

今年は、私の安全保障論の核心を為す台湾を実地に見聞すべく、山本君と調整中である。

人工知能 (Artificial Intelligence :AI) と囲碁

高比康之

第四次産業革命の旗手人工知能 (Artificial Intelligence :AI)

AI、ロボットやIoT（あらゆるものをインターネットで結ぶ）などの先端技術による産業構造を改革する第四次産業革命は、世界経済フォーラムのダボス会議で近年大きく取り上げられ、日本の成長戦略の柱でもある。その先端技術の旗手は、人工知能 (AI) である。

現代の人工知能 (AI) の誕生

現代の人工知能の開発は、1956年に開催された「ダートマス会議」に始まった。この会議で、Artificial Intelligence (人工知能) という名称が使われ認知された。

画期的に新しいものを開発するときの常として、夢を大きく描き大風呂敷を広げることとなった。ダートマス会議の後、ブームは、20年ほど続いたが、想ったほどの成果が上がらず、冬の時代を迎えた。コンピュータ等のハード・ソフトの開発進歩が、世間のニーズ・夢に応えられなかったのが大きな理由であった。

冬の時代と春の時代を繰り返しながら、ハードの進歩と共に、限定された用途における人工知能の有用性が認められ、パソコンの普及などで、1990年代に入った頃から、着実に人工知能が進歩し、2000年以降のコンピュータソフトにおけるディープラーニングの開発によるAIブームとつながった。

人工知能 (AI) と人間とのゲームにおける盤上の争い

人工知能とゲームは、相性が良く、ゲームはコンピュータ情報処理の研究課題であり題材でもあった。そして人工知能進歩の素人受けのする指標の役割を果たして来た。

チェス

「10年以内にコンピュータはチェスの世界チャンピオンに勝つ」(1958年)

この発言は、ダートマス会議の熱気もさめやらぬ2年後の1958年一部研究者が、「10年以内にコンピュータはチェスの世界チャンピオンに勝つ」と吠えて、世間から、具体的目標として、支持を受けた。その目標は、30数年もの間実現することはなかった。

「コンピュータが、チェスの世界チャンピオンに勝った」(1997年)

1997年5月、IBMが総力を挙げこれに挑戦、開発したチェス専用のスーパーコンピュータ「ディープ・ブルー」がチェスの世界チャンピオンであるガリル・カスパロフに勝

利した。

将棋

チェスの世界チャンピオンが、コンピュータの軍門に下って次は将棋、囲碁に注目が集まった。人工知能の著名研究者で、将棋・囲碁のコンピュータソフトの開発に協力していた松原仁博士（後に人工知能学会の会長）は、「将棋は 2010 年代に、囲碁は 2030 年代にコンピュータが世界チャンピオンに追いつく」と 1997 年 12 月号の日本機械学会誌に発表し、一般通説も大体これに習った。

将棋は、世界的に見てマイナーのゲームであり、日本の国内で数十の開発業社（者）が個々に将棋ソフトの能力を向上させ、じわじわとプロのレベルに迫り、中心となった情報処理学会が 2010 年「将棋のトップ棋士に勝つこと」を目的にプロジェクトを立ち上げ、2015 年には「最強のコンピュータソフトの実力は、人間を超えた宣言（勝利宣言）」をしました。これは予測ぴったりでした。

囲碁：AI「AlphaGo」と世界トップ棋士「イ・セドル」の対決

囲碁対戦コンピュータソフトも、一部学者によって早くから研究されていました。2000 年代中頃までは、アマチュア低段者のレベルであったが、2006 年「モンテカルロ木探索 (Monte Carlo Tree Search)」を実装したフランスの囲碁プログラム「Crazy Stone」が登場し、パソコンの能力向上もあいまって格段の棋力向上を果たしました。モンテカルロ法として知られる探索アルゴリズムは、44 年前、私が陸幕 OR 班にいた頃既に実用されておりその後長い間、囲碁ソフトに活用されなかったのは不思議なものを感じますが、囲碁ソフトの進歩の最初のブレークスルーになったことは事実であり、今も重要な技術になっています。しかしその進歩はプロに四子で善戦するレベルに達してから停滞していました。

この間ディープブルーでチェスのチャンピオンを下した IBM は、スーパーコンピュータ「ワトソンソン」でアメリカのテレビクイズショーにおいて人間のチャンピオンを次々と制していました。2015 年、将棋におけるコンピュータソフトの勝利宣言により人工知能は、囲碁以外の古典ゲームにはすべてに勝利しました。しかし囲碁は別格で、追いつくには更に 10 年に近い年月が必要という認識を囲碁界と関係者が共有していました。

なぜなら、囲碁は 19 路×19 路の碁盤で戦うのですべての手数は 10 の 360 乗、即ち 359 桁となる（これは碁盤に現れる場の数、専門的には合法局面数と言う 171 桁とは別です）ちなみに地球の原子数は、50～51 桁数で、宇宙に存在する全原子の数は 80～81

桁と推定され、それらより大幅に多い。現在のコンピュータを 1 万台あつめ、24 時間休まず動かしてもコンピュータが処理できる手は、精々 20 桁にとどまります。

将棋が敗れた翌年の 2016 年 3 月、米グーグルの子会社 DeeoMind が作成した囲碁対戦用ソフト AI「AlphaGo」が世界のトッププロ囲碁棋士、韓国の李世石（イ・セドル）に挑戦してきたと聞いたときは驚きました。

グーグル社は、「AlphaGo」に CPU（中央演算装置）を 1202 台、GPU（画像処理装置）176 台を集め、勝者賞金 1,000,000 ドル用意しました。

勝者賞金は、円にして 1 億 1 千万円で囲碁界の大天才に対する敬意を感じ納得しました。ちなみに、世界で一番高い優勝賞金は、日本の棋聖戦で 4,500 万円、ダントツです。

結果は「AlphaGO」の 4 勝 1 敗でイ・セドルは敗れました。

囲碁ソフトは、進歩はしていましたが、ここ数年アマチュア高段者レベルで停滞気味であったのが、突然出現して、プロの世界トップを破ったのですから驚きです。

「AlphaGo」何故そんなに強い！

納得できず、そこで「AlphaGo」について少し勉強してみました。

最初に判ったのは、グーグル社会長エリック・シュミットの「人工知能」をグーグルの次世代成長戦略と選定した先見性と、熱意です。グーグル社 CEO:S.ピチャイも「我々は、モバイル中心の世界から、AI 中心の世界に移りつつある」と述べ、社挙げて「人工知能の新興企業」を多数集めました。その中に脳の神経網の研究者で「深層人工神経網研究所」を設立したイリヤ・スツケヴェル博士や、機械学習研究のディープマインド社とデミス・ハサビス博士がいて、フェイスブック社等と競って、会社・人ともに買収に成功しています。

まさにこの買収した両社と人材が「AlphaGO」の成功の原動力になりました。技術的に大きく貢献があったのは、従来数理統計的な解析に偏りがちであったプログラムの開発に人間の脳の研究成果「深層人工神経網」を大きく取り入れたことのようにです。

ここで機械学習の一部を具体的に紹介すると、囲碁はある局面から次の一手を打つことの連続のゲームであり、局面と次の一手が基礎データになります。それには過去の棋譜をデータとして使います。AlphaGo は、基礎データとして、ヨーロッパのアマチュアの高段者がインターネットで対局した 16 万の棋譜から 2940 万の局面状況を抽出しこの局面で次にどこに打つかを学ばせます。実際はどこに打つかは、判っており、局面における打つ石のパターンを分析し身につけることが狙いです。次いでその能力を持つにいたったプログラム同士か、または、ほかで作られたソフトと対戦させます。コンピュータ同士なので、数百万回の対戦ができ試行錯誤で勝つ確率の高い方向に収斂させることができます。その課程で、人間の脳の複雑な神経回路網をまねる手法が機能しているようです。人間にたとえると、子供に囲碁のルールを教え、ごく優しい定石パターン

とちよつとした石の形を教え、後は子供同士せつせと打たせ切磋させて上達させればよいとしたやり方に近いと言えます。

インターネットを見ていると、イ・セドルが敗れた半年後の10月から11月にかけて、ディープマインド社は「ディファレンシャルブル・ニューラル・コンピュータ」を始めとする研究・開発の成果を多数発表しました。「AlphaGo」の勝利は、人工知能のブームを呼び戻すきっかけとなったと同時に、「AlphaGO」自身汎用性を有することが確認され、かつ、従来のソフト技術に最近の人間の脳の複雑な神経網の研究の進歩を組み合わせ、停滞気味であった人工知能開発に大きな刺激を与えそうです。

最後にイ・セドルが負けたのは残念ですが、日本の囲碁ソフト「Zen」が東大研究室の協力を受けて、画期的に能力向上をしつつあると聞いて、少し明るい気分になっています。

埋め草

年賀状考

元旦の楽しみの一つに年賀状がある。

おせちと小さな杯でのお屠蘇で新年を祝うと、年賀状が配達される。今年はいつもの年よりは心持早く来た感じだ。

年賀状は差出人の思いや近況を短切に知らせてくれる。曰く「高齢者の旅にクルーズが最適、3食昼寝付き、且、目的地には船が運んでくれる」、「孫がトーダイに合格した」、夫人を亡くした先輩から「新たな話し相手が出来た」等々である。明るい知らせにこちらの気持ちも明るくなる。

ただ最近は、「高齢のため来年から賀状は失礼する」、「年賀状を卒業させてもらう」、「IT化してメールにする」といった知らせも多くなった。加齢による体力・気力の衰えは免れないのだから致し方ないのかなとも思う。

しかしそんな中に、「今年も賀状を書く喜びをかみしめる」といった趣旨のが二通あった。一つは、飛行隊長時、スキーでぶつけた胸の骨折をこらえて勤務し、トップを極めた畏友、もう一つは、方面総監を務めあげ今なお軍事研究に邁進している異友からだ。

私は、彼らほどの頑張り屋ではないが、手が動く間は出すことにしようかなと考えることにした。

(二宮隆弘)

平成 29 年度総会及び懇親会のご案内

事務局

平成 29 年度総会及び懇親会を下記により開催致しますので、ご参加いただきたく、ご案内申し上げます

記

- 1、日 時 平成 29 年 5 月 11 日（木） 1200～1500
- 2、場 所 グランドヒル市ヶ谷 電話 03-3268-0111（代）
- 3、総 会 1200～1230
- 4、懇親会 1230～1500
- 5、会 費 6000 円 当日、会場受付で申し受けます。

なお、総会出欠、委任、近況連絡の葉書は、整理の都合上、4 月 15 日頃までにご返信下さい。

一期生会の年会費送付用の振替用紙を同封していますので、ご送金をお願い申し上げます。（総会の受付時でも可）

以上

平成 30 年度の総会及び懇親会の会場を仮予約しています。

来年のことを言うと鬼が笑うと言いますが、皆様の予定に心づもりをして於いて下さい。

- 1、日 時 平成 30 年 5 月 11 日（金）
- 2、場 所 グランドヒル市ヶ谷
- 3、総 会 1200～1230
- 4、懇親会 1230～1500

栄典制度について

事務局

我々のクラスも傘寿を越え、お互いに健康問題を内蔵している段階となってきました。かつて地連に勤務した時に退官者の死亡叙勲にかかわる手続きをした記憶がありますが、所詮は他人事で身近には感じていませんでした。

後輩からは定年時に「叙位・叙勲について」という書類が手渡されている筈だと言われましたがさっぱり記憶に残っていませんでした。

最近同期生の訃報を聞くたびに気になっていましたが、たまたま陸自修親会の機関紙「修親」2月号に「栄典—国家からの榮譽」という記事が掲載されていたので関連部分を抜粋します。

現行の栄転制度には生存叙勲と死亡叙勲があり、生存者に対する勲章の授与は、原則として年二回、春は四月二十九日、秋は十一月三日に危険業務従事者叙勲及び春秋叙勲が発令されています。なお、死亡叙勲については、上記叙勲とは別に随時授与されています。

死亡叙勲は、国家又は公共に対し功労のあった者が定年退職後死亡した場合に、その功労に鑑み、春秋叙勲及び危険業務従事者叙勲とは別に随時授与されています。

なお、死亡叙勲については、ご遺族からの申し出によって手続きを進めることとなります。手続き期間は死亡の日から五日以内に申し出、三十日以内に閣議決定、裁可を完了させるよう制限があり、この期間を過ぎますと叙勲が受けられなくなります。

叙勲は、身の危険を顧みず職務を遂行する自衛隊員に対する国家からの榮譽の授与であり、広く国民から祝福されるものですので、忘れることなく下記にご連絡下さい。

①最終勤務部隊の総務、人事担当者

②現在の居住地の地方協力本部の総務、人事担当者のいずれか

なお、各幕僚監部では何れも「人事部、人事計画課、サービス（海・空は班）」が担当していますのでお問い合わせ下さい。

また、同期生会の幹事（陸・陸井 043-422-8232、海・藤井 03-3719-8594、空・田中 03-6459-2952）の他、防大同窓会にも弔電についての規定がありますので下記にもご連絡下さい

162-0845 東京都新宿区市谷本村町 3-19 千代田ビル 109 号 防大同窓会事務局
電 03-6265-3416 info@bodaidsk.com

事務局便り

事務局長 大 東 信 祐

1、担当者の交代

総括幹事の山口君が身体不調のため交替の申し出があり、急遽陸の担当幹事であった大東が総括担当となり、陸担当は会計監事の陸井君に引き継ぎました。なお、山口君は残って会計幹事として引き続き残っていただきます。

2、原稿の募集

このようなことで、急遽会報第 37 号の作成、編集を担当することとなりましたが、卒業 60 年の記念号として作成することとなりましたが、果たして原稿が集まるか不安の中のスタートでした。久里浜当時の資料等については「防衛大学校十年史」「卒業アルバム」から収集することが出来、皆様からの積極的な寄稿により在校中、現役時代、退官後と各時期に応ずる記事が出来上がりました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

3、同窓会総会への参加について

防大同窓会総会は今年 3 月 11 日に開催との連絡を受けています。一期生会から会長及び陸、海、空の委員が参加を予定していますが、会報の作成には間に合いませんので次回の臨時会報でお知らせします。

4、「防衛大学校開校の地の記念碑」を久里浜に建立の件、

保安大学校開校の地である久里浜に発祥の地の記念碑を建立する件については防大同窓会として発議し、学校当局と調整し、久里浜地区（駐屯地）に建立する方向で検討されることとなった、（総会の協議事項）まだまだハードルは高いが一期生会としてはこの動きをバックアップすることとしたい。

5、対番構想について

31 期学生との対番構想については 31 期の同期生会と懇談を行なっているが、31 期は現役として勤務中であり、名簿管理の委託、慶弔等の事業の引継ぎ等は難しいというのが現況であり、相互に総会等に招待する等の精神的な連携の強化に止まらざるを得ないとの観測もあるのが現況です。

6、振込用紙の変更

現在同期生会費は年間 1000 円として運営しているが郵便局の振込手数料が馬鹿にならない出費となっており今回から振り込み手数料を各人で負担して頂くこととさせていただきます（振込用紙を赤色印刷から青色印刷に変更）。

防衛大学校第一期生会会報

第37号

平成29年3月

発行者 深山 明敏

編集者 大東 信祐

山本 晃三

住所 162-0845 新宿区市谷本村町13-19 千代田ビル101号

防衛大学校同窓会本部事務局気付

電話&FAX 03-6265-3416

連絡先 176-0004 練馬区小竹町1-35-17

電話&FAX 03-3956-7212